
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 星を見つめる者 ~

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～星を見つめる者～

【Nコード】

N0097K

【作者名】

秋風

【あらすじ】

幼き頃、家族と見た輝く星々。戦争という大きな回り道を経て、星を目指すことを誓った青年、スウェン・カル・バヤン。D・S・S・Dの一員となったスウェンは2年の歳月を経てMSに乗れるようにまで回復を遂げた。星を目指すために日々努力を続けるスウェン。新たなD・S・S・D宇宙センター設立記念のパーティーの日に起こる謎のエネルギー反応。スウェンは再生機として復活を遂げたストライクノールを駆り不審な反応を追う。そしてその先にある光にノールと共に巻き込まれた彼の身に起こった事態とは？

魔法少女リリカルなのはStrikerSとスターゲイザーのクロスオーバー作。秋風の第2作目のリリカルFFファンフィクションです。こちらも蒼天が愛した混沌と併用して連載できるよう、努力してまいります。ちなみにいつもながら、設定を壊されたくない方はご覧にならないことをお勧めします。

Episode 「蘇る黒い輝き」(前書き)

秋風第二弾の連載小説です！

機動戦士ガンダムSEED C・E・73 STARGAZER
とのクロスオーバー

主人公はスウエンです！

そして現在連載中の魔法少女リリカルなのはStrikerSと蒼天を愛した混沌と併用して頑張ります！

注意！：最初に言っておきますが、スターゲイザーは漫画版後の話を考えたものです。あと、スウエンがアニメと違ってかなりやわらかいです。その辺はご了承ください！

Episode 「蘇る黒い輝き」

C.E.75・・・かつて起こった大戦から2年が経過した。ナチユラルとコーディネーター・・・そう呼ばれた二つの人種による戦争は終結を向かえ、互いに手を取り合える未来への模索を続ける。スウェン・カル・バヤンも、そんな大戦での被害者であり、戦った男である。さまざまな罪を背負いながらも、子供の頃に見た夢「星を目指す」ことを見つけたスウェンは、新たに設立された宇宙センターのロビーで無限に広がる宇宙の星を見ていた。

「スウェン、こんなところにいたの？」

「セレーネ・・・」

「もうすぐこの設立記念パーティーが始まるそうよ。集合はホルね？」

「ああ、わかった」

スウェンに声をかけた女性、セレーネ・マクグリフ。彼女はかつての大戦でスウェンと戦いを繰り広げた女性。大戦中に行われたスターゲイザー計画の中心人物であり、MS「スターゲイザー」によって漂流から帰還した女性。スウェンは彼女に母の面影を感じている。彼女の誘いでこの宇宙センターに来たのも彼女の優しさがあったからかもしれない。

「パーティー・・・か」

かつて地球軍人だったところには出たことは数回で、それもすべて上

官の護衛や潜入などばかりだ。こういつた記念になんの命令や思想もなしに参加するのは初めてかもしれない。スウエンは部屋に戻る。研究員の服と白衣はさすがにパーティーと名のつくものには不釣合いだからだ。

「セレーネ・・・どうしてこう、準備がいいんだ」

そこにあるのは背広だ。一度も使用されていないからか、綺麗にビニールが被せられている。メッセージで、『これを必ず着てくること』とある。スウエンは仕方なくそれを着てホールに向かった。ホールに行くと、そこで一人の男を見かけた。男はこちらに笑顔で近づいてくる。

「スウエン！」

「ソルか・・・」

ソル・リユーネ・ランジユ。第一世代のコーディネーターの少年であり、MS「スターゲイザー」にセレーネと共に乗った少年である。コーディネーターとナチュラルの確執についてはよく悩んでいた。

「ははっ、スウエンもセレーネに用意された背広？」

「ああ、そうだな。お前もか」

「そうだよ。似合うかい？」

「馬子にも衣装・・・だな」

「そりゃないよスウエン！」

ソルはがっくりと肩を落とす。しかし内心ソルはこういう彼の冗談が嬉しかったりする。彼はブルーコスモスと呼ばれる反コーディネーター組織の思想などを叩き込まれたことで、冷酷非常な性格になっていた。しかし、この2年間で彼は本来の輝きを見せていた。

「……冗談だ、似合うぞソル」

「ははっ、ありがとうスウエン」

こうして二人でホールに入ると、宇宙センターのスポンサーや、富豪などがいた。

「うわぁ……なんかすごいな」

「……そうだな」

「スウエン！ソル！」

二人が声のかかる方を見ると、そこにはドレスを着たセレーネの姿があった。

「ちゃんと着てるわね？私が出意した背広」

「セレーネ、すごくドレスが似合うね」

「そう？ありがとうソル」

セレーネは先ほどの白衣とは違い、真紅のドレスに髪をまとめた格好だ。

「どう？スウエン？」

「ああ、似合うんじゃないか？」

「素直じゃないなあスウエンは」

ソルの言葉を見殺し、スウエンは近くにいたウェイターからシャンパンを受け取る。

「そろそろ、開会式のような」

舞台の上には司会らしき男が立っている。

『それでは皆様、今回新たに設立された宇宙センターの記念パーティーを始めようと思います。最初に、今回のパーティーに駆けつけてくださったプラント最高評議会議長、ラクス・クラインさまよりお言葉と乾杯をいただきます。』

男は退場し、ラクスと呼ばれた女性にマイクが渡った。プラント最高評議会議長であり、前大戦を終戦に導いた歌姫「ラクス・クライン」である。

『皆様、今日はこの記念すべき日に集まったことを、光栄に思います。この宇宙センターは、前宇宙センター同様、『フロンティアの前進』を理念にすると聞きました。プラント、地球連合、そしてオリーブの保護の下、それを実現することを心より願います。では、新たな宇宙への一步を目指し、乾杯』

『乾杯』

こうしてパーティが始まった。ソルは料理を食べる。しかし、スウエンは一人難しい顔をしていた。

「どうしたんだ？スウエン」

「いや・・・なぜ、ここにクライン議長がいるかと思ってな」

「ああ、今回の宇宙開発については、プラントの評議会も協力をしてくれたのよ。彼女はナチュラルもコーディネーターも関係なく、宇宙へと一步を踏み出す協力をしてくれたのよ」

「なるほど・・・」

スウエンは呟きながらシャンパンを口に流す。すると今度は白い制服を着た男が目に入った。

「あの男・・・確か」

「ああ、キラ・ヤマト。大戦の英雄ね」

キラ・ヤマト。大戦の英雄であり、かつては地球連合の新型機体を駆ったと言われている。ちなみに現在使われている地球連合のMSオペレーションシステムのOSは彼が開発したものがオーブから流出したのだと言われている。その後はクライン派と共に二度もザフトの暴走を止めた英雄として称えられてた。スウエンも、彼が駆ったMS「ストライクガンダム」からの改修機のMS「ストライクノワールガンダム」を使っていた。なので、彼の名前くらいは知っている。この二年間でも随分と騒がれていた。スウエンは彼に近づき、シャンパンを差し出した。

「飲むか？」

「いえ、お酒は駄目なもので」

「キラ・ヤマト・・・だな」

「はい、そうです」

キラは特になんの警戒もしていない。スウェンは少し驚いていた。こんな優男、いや、こんな穏やかな表情を持つ男が、大戦で英雄となったことに。

「俺はスウェン・カル・バヤン・・・元地球軍・・・ファントムペインに所属していた」

「えっ・・・？」

「ストライクノワール・・・そう呼ばれる機体を駆って戦っていた」

「スト・・・ライク」

キラは驚きの表情を浮かべる。それもそのはずだ。彼もまた同じ名を持つ機体を駆っているのだから。

「別にお前に恨みがあるわけでもない。だが、聞いてみたいと思うことがあった」

「・・・なんですか？」

「何故、コーディネーターのお前が俺たちナチュラルの味方をしたのか」

今までコーディネーターを殺し続けたスウェンにとっては当然の疑問だった。別にコーディネーターが完全にナチュラルを嫌っているわけではないし、その逆も絶対ではない。しかし、地球軍は今までコーディネーターを倒してきた。だが彼はコーディネーターでありながら地球軍の船で行動を共にし、戦っていた。彼はコーディネーターを自分と同じように手にかけてきた。それは事実だった。

「僕は確かに、地球軍にいました。いろんな事情や成り行きで、ザフトと戦うことになりました」

「何故？」

「友達を、守りたかったから」

キラの言葉に、スウェンはまた驚く。自分の命を守ることが優先される戦場で友を守ることなど、考えられることではない。いや、友がいないスウェンにとってはそんなことが思い浮かばないのが正しい。だがスウェンは理解した。彼がどうして英雄になったのか。

「そうか……すまない、貴方の想いは大きいようだ。俺とは違う」

「スウェンさんは何故、MSに？」

「俺は……何故だろうな。ブルーコスモスの施設で狂ってしまった俺に戦う理由なんてなかった」

「スウエンさん・・・」

キラが悲しい表情を浮かべる。彼も幾度となくその「戦争」というものに苦しめられた被害者だったからだ。

「だが、今は夢がある。」

「夢、ですか？」

「星を目指すこと。それがここにいる理由であり、夢でもある」

「立派な夢だと思います」

「あなたにそう言ってもらえると嬉しい」

スウエンは少しだけ微笑む。すると、突然激しい揺れが起こった。

「なんだ!？」

『緊急警報、緊急警報、ここからの付近に、謎のエネルギー反応』

「セレーネ!」

「ええ、すぐ調べるわ!」

「キラ・ヤマト。あなたはクライイン議長の所へ。ここは我々D・S・S・Dが調査する。」

「わかりました、お願いします」

こうして、スウェンは宇宙センターの管理室へと走った。

管理室に着くと、セレーネがドレス姿でコンソールを叩いている。

「何かわかったか」

「わからないわ。MSや戦艦のエネルギーの反応ではないし、わからない」

パソコンには『UNKNOWN』と表示されている。

「わかった、シベリアンで調査しよう。キーを一つ貸してくれ」

シベリアン・・・正式名称、シベリアンアストレイD・S・S・Dカスタム。D・S・S・Dの宇宙センターに配備された警備用のMSである。スターゲイザーは戦闘には不向き。さらにスウェンは先の大戦でノワールを失っているのでそれしか手はない。

「でもスウェン、君は体が・・・」

「問題ない。この二年のリハビリでMSを動かせるようにはなっている」

先の大戦でスウェンは「スターゲイザー」との戦闘によって漂流し、スターゲイザーに乗って半コールドスリープの状態で帰還した。その際右足を負傷し、しばらくは松葉杖を使うことを余儀なくされた。しかし、スウェンの体はほぼ回復状態にある。

「・・・わかったわ」

「セレーネ!？」

「でも、シビリアンは出さないわ。」

「なに?」

スウエンは顔をしかめる。それでないとすると、ここにはスターゲイザーしかない。

「これを持って格納庫へ」

そこに渡されるのは黒いキー。スウエンは疑問を持ちながらも頷き、パイロットスーツに着替えたスウエンは格納庫へと向かった。そこにあつたのは布で覆われた機体が一機。

「スウエン、今布を外すわ」

セレーネの声と共に、布が外れた。そこにあるのは隣に並ぶ白い機体「スターゲイザー」とは違う黒い機体。黒と黄色と赤を基調とし、四つの角が着いたその機体。

「ストライク・・・ノワール!？」

地球連合で開発されたX105シリーズにおいて完成系の機体と言われたそれがあつた。先の大戦で駆つたそのMS「GAT-105E ストライクノワールガンダム」。その鈍く光る黒は昔と変わらない。

「どうして、これが・・・」

『ふふっ、驚いた？』

「セレーネ、これはいつたい？」

『これは正しくはザフトが再現した再生機よ。連合の承諾も得て、OSはかつてのあなたのデータをバックアップしてあるものを連合からもらって移してある。あなたが星を目指すために、スターゲイザーを駆るまでなまらないようにね』

画面の向こうからセレーネがウィンクする。スウェンは少し笑っていた。

「ありがとうセレーネ、恩に着る」

『でも気をつけてくれよ、スウェン』

「ああ、ソル・・・頼むぞ」

『ああ、任せてくれ』

スウェンはノワールに乗り込み、OSを起動させる。

General

Unilateral

Nero-link

Dispersive

A u t o n o m i c

M a n e u v e r

と連合のマークが表示された後に表示された。頭のある文字を繋げて呼ぶ名はガンダム。ハッチが開き、スウェンはノワールを動かし、カタパルトに乗った。そして、強くその操縦グリップを握る。

「スウェン・カル・バヤン、ストライクノワール、出る！」

漆黒の輝きを放つMSは再びその宇宙へと舞った。

このときスウェンは思いもしない。この出撃によって、自分の運命が大きく揺らぐこと。そして待ち受けるその新たな戦いの幕開けを。

Episode 「蘇る黒い輝き」(後書き)

秋風「というわけで、今回で連載第二弾です!」

直人「おい、なんで俺がここにいるんだ」

スウエン「話だと、ゲスト・・・だな」

直人「スウエン、なんかやる気なし?」

秋風「もとから彼はこうだよ」

スウエン「俺は君みたいにはできない」

直人「・・・・・・・・・・」

秋風「ま、頑張っていきましょう」

直人「というか、今回リリカルが微塵にもなかったぞ?」

秋風「まあね。次回からだよ。スウエンがミッドに行くのは」

スウエン「一つ聞くが、ノワールは何故使うことになった?」

直人「まあデバイスになるのは目に見えてるとして、スターゲイザ
ーでもいいんじゃないの?」

秋風「だって、スウエンと言えばストライクノワールでしょ」

直人「そりゃそうだけど・・・」

スウエン「考えがあるのか？」

秋風「まあね」

直人「ならいいけど」

秋風「スターゲイザーも、ちゃんと考えはあるから安心しなさいな」

スウエン「果てしなく不安だ」

直人「ま、秋風だからね」

秋風「おい」

直人「あともう一個。何でキラ？」

秋風「一応、キラはスペシャルエディションのEDで白服だしさ、一度スウエンと話をさせたかったりしてw」

スウエン「だが、それ以上に重要な意味もあるのだろうか？」

秋風「まあね」

直人「ま、そんなわけで、今回も感想を大募集だ」

スウエン「さまざまな提案や意見、待っているぞ」

秋風「それではスウエン、次回予告をよろしく」

スウエン「次回Episode 1『星との邂逅』果て無き世界、
駆け抜ける、ガンダム！」

秋風「……まあ、いつか」

直人「スウエン、リクエストは？」

スウエン「最大出力の一閃を、死なぬ程度に……」

直人「オツケー」

秋風「ま、待て……ぎゃあああああああああ……！！！！！！
！！！！！！」

Episode 1 「星との邂逅」 (前書き)

早速第一話です。蒼天を愛した混沌はまた夜に・・・

では本編どうぞ

Episode 1 「星との邂逅」

宇宙センターから出撃して数分。スウェンはその宇宙を飛んでいた。あるのは大戦で残ったMSの残骸と、デブリだけ。

「確か、この辺りのはずだが・・・」

宇宙ステーションから送られたデータではノワールが稼動しているそのすぐ近くだ。しかし、何も無い。しかし、異変は突然起こった。

ピー！ピー！

「何！？制御、不能だと！？」

『どうしたの！？スウェン！』

「わからない、急にシステムがダウンした！そちらで何かわかるか！？」

『わからない！こちら・・・ザ、ザー・・・』

通信が途絶えた。というより、ノワールに何か異常が起きていることは確かだ。すると、まだかろうじて稼動しているモニターに、光が見える。

「なんだ、あの光は・・・」

その目に映るのは、遠くにある星達よりも強い光を放つ何か。スウェンは理解した。この光こそ、ノワールを狂わせている光なのだ。

そしてその光にノワールが吸い寄せられていることも。

「ノワール・・・動け！」

スウエンの言葉にノワールは動かない。もはやシステムはほぼゼロ。カメラのみが動いている状態だ。武器も使えない、ハッチも開けることができない。機体を捨てるのはセレーネに申し訳ないと思っただが、もはや逃げることはできない。そして、その強い輝きが迸った。

「う、うあああああ！！！」

スウエンはコクピットの中で気を失った。

スウエンは夢を見る。それは過去に行った自分の罪。自分がトリガーを引き、破壊するMS。そしてスラムで何の罪もない人間を自動砲火器で撃ち殺していく。痛みも、悲しみも感じない。そこにあるのはただ下される命令のみ。そして風景は宇宙へと移る。攻撃命令が出された宇宙ステーションでスウエンは何機もの機体を落としていく。そんな中現れる、自分の機体とはまた違う、白いMS。星を見る者、「スターゲイザー」それとの戦闘。相討ちとなり沈黙する。

俺は死ぬのか

目が覚めてから映ったのは黒き髪の女性。まるで母のような暖かさを持ったその女性。共に帰るために、女性は自分を助けた。一人で死ぬのは寂しいからと、言っていた。

帰れるわ・・・必ず

その白き輝きを放つMSは無限に加速し、その宇宙を駆け抜けた。

「ここは・・・」

そこは地上だった。スウエンは目を開け、体を起した。体中に激痛が走った。

「ノワールは・・・どこに」

スウエンはコクピット内部にはいなかった。その地面に叩きつけられていた。すると、その近くには浮遊する機械があった。なにやら音がする。どうやら、ロックされているらしい。

「ぐっ・・・あっ！」

なんとか痛む体を抑えて転がる。しかし、その機械から放たれた光線が足を掠り、血が噴出す。

「うっ・・・ぐっ・・・」

体中が何故か痛み、逃げることができない。その多くある機械兵器を前に、スウエンは覚悟を決めた。その時だ。突然その機械達に小石と雷の嵐が振り注いだ。そしてスウエンの前に舞い降りたのは二人の『人間』だった。

こうなる約数分前のこと。その場所、魔法世界ミッドチルダ・・・平和であるその首都クラナガンの郊外にある森で、次元反応が出た

ことから機動六課が出動し、隊長である高町なのはとフェイト・T・ハラオウンが出撃していた。

「なのは！あそこ！」

金髪の少女、フェイトが指差す場所では、ガジェット・ドローンがヘルメットを被った人間を襲っていた。

「助けるよ！フェイトちゃん！」

「うん！」

こうして、二人は魔法を放ち、そのヘルメットを被る人物の前に降り立った。

「大丈夫ですか!？」

依然としてその光景に驚くスウェンは、声をかけられた。しかし、体の傷がひどく声を出すことができなかった。

「今ヘルメットを取りますから。待ってて下さい」

なのはが言いながらヘルメットを取った。すると、そこには薄紫の髪をした男性の姿だった。この時フェイトは

(カッコいいかも・・・)

などと思ってしまったらしい。フェイトが見とれていると、なのはが慌てた。

「フェ、フェイトちゃん！とりあえず傷の手当てを・・・！」

「あ、そ、そうだねなのは！」

こうしてなのはとフェイトがその持ち合わせた救急用具で傷の手当てをする。足の傷以外もところどころ打ち身や痣が見られた。

「これでよし・・・っと。あの、喋れますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スウエンは小さく頷く。喋ると体に響く。あまり喋れないが、言葉を発する意思はある。すると、なのはのレイジングハートに警告が入る。

『付近でガジエットの反応を確認。すぐに迎撃を』

「フェイトちゃん！」

「うん、なのは！あなたはここにいて！」

こうして二人はガジエットの大群に向かっていく。一方のスウエンは未だに状況が掴めなかった。今、何が起きているのだろうか？自分より年下なその少女たちが、なにか杖のような物を手にビームライフル並みの砲撃などを発射している。これはいったいなんなのだろうか。すると、少女たちに巨大な機械が迫る。その時二人の戦いを見て直感する。

このままでは、二人は危ない

戦場で戦ってきた男の直感だった。スウエンは何とかしようとして立ち上がる。すると、それに気がついたフェイトが叫ぶ。

「だ、駄目だよ！立ち上がったたりしたら！」

「駄目だ、逃げろ！」

スウエンは精一杯の声で叫ぶ。しかし、その丸い巨大な機械からアームが展開された。この瞬間思った。

（目の前で人が死ぬのは、もう嫌だ！）

一瞬脳裏に家族の死、そして地球連合にいた仲間の死が過ぎった。スウエンは力になれないとわかっていながら駆け出した。そして心のそこから、こう願った。

（誰か俺に、星を目指すための力を！）

その瞬間、スウエンの首にいつの間にかあった黒い水晶が輝いた。

「なっ！？」

その光はスウエンを包み込み、変化をもたらした。そこを駆けるのは黒い輝きを見せるロボット。ストライクノワールだった。スウエン自身なにが起こったかはわかっていなかった。だが、迷っている暇はない。スウエンはノワールストライカーにマウントされたMR Q10フラガラツハ3ビームブレードを構え、足と背中中のバーニアを吹かした。そして一気に距離を詰めてそれを切り裂く。

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」

次々と襲い掛かるその機械を斬る。そして突進してきた機械兵器に向けてEQS1358アンカーランチャーを飛ばす。

「はあああああああ!!!!!!!」

その射出されたアンカーが機械に突き刺さると、スウェンはそのままそのアンカーを握って機械同士をぶつけて粉砕した。

「す、すごい……」

助けられたなのはたちはその光景をただ驚いて見るしかなかった。その無駄のない動き、躊躇ないその敵の粉砕。その力は驚くと同時に、少しの恐怖も感じていた。

「う……」

するとスウェンはノワールから元の人間の姿へと戻り、その場に倒れ伏した。

「あ、大丈夫!?!しっかり!」

「セレーネ……」

気絶する寸前、スウェンはセレーネの面影を見た。

次にスウェンが目を覚ますと、そこはどこかの医務室だった。とこるところに包帯が施されている。どうやら先ほどの女性たちに助け

られたらしい。だが、スウエンはわからないことだらけだ。

「何故、ノワールが・・・？」

全長17.72m 重量90.51tあるその巨大ロボット、通称モビルスーツ。それは人が『乗る』ロボット兵器だ。なのに、自身は何故なったのか検討がつかなかった。すると、ドアが開き、ショートカットの女性と、サイドポニーの女性、そしてロングヘアの女性が入ってきた。後ろの二人は、どこかで見た気がする。

「初めまして。機動六課部隊長の八神はやて言います。先ほどは二人を助けていただき、ありがとうございます」

「高町なのはです。さっきは助けてくれてありがとうございます」

「フェイト・T・ハラオウンです。ほんと、さっきはびっくりしたけど、助かったよ」

「スウエン・カル・バヤンだ。ここは、どこだ？」

そう自己紹介をして聞いた。

「ここはミッドチルダの機動六課という部隊・・・って言ってもわからないかな。スウエンさんは時空管理局をご存知ですか？」

「いや、知らない組織だ」

こうして、はやてはスウエンの存在について確信を得る。そして真剣な表情でスウエンを見た。

「今から話すことは事実です。しっかりと聞いてください」

こうしてはやては語りだす。ここはスウエンの住んでいた世界ではないこと。次元漂流者という名の、世界をまたぐ迷子であること。そしてスウエンを驚かせたのは「魔法」の存在。御伽話でしかないはずの「魔法」という力を教えられる。たしかになのはとフェイトが使っていたのは魔法と呼べる物だった。それは認めざるを得ない。

「で、スウエンさんの世界についてやけど、スウエンさん、教えてもらえますか？」

「ああ、いいだろう・・・」

スウエンは語る。C・E・と呼ばれる時代の地球について。そして自分が宇宙ステーションのD・S・S・Dに所属することを。そして探査中に光に巻き込まれ、この世界にいたことを。

「もしかしたら、スウエンさんは平行世界から来たのかもしれない」

平行世界。それはパラレルワールドとも呼ばれる「もしも」の世界。例えるなら、スウエンがここに来ることのなかった世界。もしくは、大戦のどこかでスウエンが死んだ世界。そのさまざまなものが入り混じった世界を、パラレルワールドと呼ぶ。

「宇宙ステーションか・・・なんかすごいねえ」

「別にたいしたことじゃない。宇宙にはプラントと呼ばれる宇宙で人間が住める環境が作られている」

その言葉に3人が驚く。それもそうだ。今のミッドチルダの技術では人工衛星などができている程度で、人が宇宙で生活する技術は確立されていない。

「そんな、ところだな」

スウェンは話さなかった。自分の世界で起こった戦争の話を。そして自分が軍人であり、何人も人間を虐殺してきたことを。

「それですね、スウェンさん。平行世界から来た人間の方を元の世界に戻すのは、今の管理局の技術じゃ難しいんです」

「そうか……」

「あ、でも！ここで住める環境なんかは用意しますから、安心してくださいね！」

フェイトが笑いかけるが、スウェンは笑わなかった。元の世界に帰れない。そして、星を目指す夢も、もはや費えたも同然だ。部屋を静寂が包み込む。すると、なのはは思い出したかのようにポケットから何かを取り出した。

「これ、スウェンさんのですか？」

「いや、知らないが……」

そこにあるのは黒い水晶。

「スウェンさんの首に掛かってましたけど。」

そう言われても、スウェンには見覚えがなかった。すると……

『こんにちは、マイマスタースウェン』

宝石が喋った。

「えっ!？」

なのはが驚く。スウェンも同じだった。

「これはいったい？」

「まさか、デバイス？」

『はい、私はこの世界ではインテリジェントデバイスと呼称されるものにあたります』

その声を、スウェンは聞いたことがあった。

「まさか、セレーネ？」

『セレーネ・・・ああ、これは通信から聞いた音声を再現しただけです』

音声の再現。まさか・・・

「ストライク、ノワール？」

『大当たりです。マイマスタースウェン』

スウェンは混乱する。あまりの自体、状況に。その黒い水晶は自分がストライクノワールであると語る。すると、スウェンの頭の中に、

セレーネの声が響く。

「（マスター、落ち着いて聞いてください）」

「!?!」

「（これは念話と呼ぶ技術。テレパシーのようなものです）」

「（何故、これで話す?）」

スウェンは心の声でストライクノワールに語りかける。

「（こうでもしないと、口裏が合わせられないからです）」

「（口裏?）」

「（ええ、マスターもご存知とは思いますが、マスターの世界の戦争激化はMSです。そのデータが詰まった私を解析されれば、この世界でも戦争が起こってしまうでしょう。ですから、私自身もロツクをかけましたし、情報の権限もすべて貴方にあるというわけです」

スウェンはノワールの言うことを理解する。確かに、この世界で戦争が起きれば、MSは強力な殺戮兵器だ。自分はまさしく、その火種を今持っているのだ。

「（わかった。お前については詳しく話さない）」

『ではマスター、立ち上がって言ってください、貴方の剣を出す言葉を』

ノワールに言われ、スウェンは立ち上がる。魔法の治療を受けたためか、あまり痛みはなかった。

「俺は、星を指す・・・ストライクノワール、起動」

するとスウェンは光に包まれ、ストライクノワールになる。3人も驚きの目でそれを見ている。その黒く鋭い光を放つストライクノワール。落ち着きを取り戻したはやてがそばに駆け寄る。

「あ、あの・・・スウェンさん？」

「なんだ？」

ノワールとなったスウェンは声を発する。

「一応ですね、許可なくデバイスや魔法の起動はこの世界では禁止されているんです。解除できますか？」

「ノワール・・・」

『オーライ、武装解除』

言葉と共に再び光ると、スウェンは元の姿へと戻った。

「な、なるほど・・・案外簡単に戻れるんですね」

「そのようだ」

「じゃあ今日はゆっくり休んでください。多分明日には色々決まっ

てくることもありますので」

はやての言葉にスウエンは頷き、ベッドへ戻った。そして3人が退出した後、その天井を見つめていた。

「俺の目指す星は、いったいどこにあるんだろうか……」

そう呟き、スウエンは眠りに着いた。

Episode 1 「星との邂逅」(後書き)

秋風「ふう……」

スウエン「長かったな」

秋風「まあね、今回は定番だけど模擬戦だからよろしく」

スウエン「……少し不安だな」

秋風「まあそう言わずに。頼むよスウエン」

スウエン「だがいいのか？このセレーネと同じ音声と言う設定は」

秋風「ああ、それ？どうだいノワール」

ノワール「それについては簡単なことです。私の機体に入った通信者の声を記録し、それが世界を渡ることによって登録され、デバイスと化した私の認証登録になったわけです」

秋風「でもあれだ。スウエンってマザコン？」

スウエン「な、何をいう！」

ノワール「秋風さん、それは色々言っではいけないことです」

秋風「ま、それはいいか。ではスウエン」

スウエン「次回、Episode 2『黒い星の力』天にある龍、打

ち實け、ガンダム！」

Episode 2 「黒い星の力」(前書き)

お待たせしました、第2話です。最近忙しくて書く暇がありません
(汗)

では本編どうぞ

Episode 2 「黒い星の力」

次の日、スウエンは朝早くに目を覚ました。

『おはようございます、マイマスタースウエン』

「ああ、ノワール」

スウエンとしてはこの声はセレーネの声にしか聞こえないので、なんと不思議な感覚だ。

「今は、何時だ？」

『午前6時です』

外は心地のよい日差しが差し込んでいる。すると、扉が開いた。

「おはようございます」

「…………おはよう」

そこにいるのは薄い金髪の女性だ。

「私はシャマル。この医師です。体調はどう？」

「ああ、問題はない。」

体は魔法をかけてもらったことでかなり回復している。怪我もそこまで重くない。少し体が軋む程度だ。すると、スウエンの目にありえない光景が飛び込んできた。

「おはようございますです」

そこにいたのは水色の髪をした数十センチしかない少女だった。

「人形・・・？」

「違いますー！リインはお人形じゃありません！」

と、怒っているがあまり怖くない。むしろ可愛いほうだ。それにシヤマルが苦笑する。

「この子はリインちゃん。八神家の末っ子よ。まあ、簡単に言えばユニゾンデバイスね」

「ユニゾンデバイス？」

ユニゾンデバイス。それはベルカによって開発されたデバイスで、言うなれば、ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもの。姿と意志を与えられたデバイスが状況に合わせて、術者と「融合」し、魔力の管制・補助を行う。この形式では他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができる。しかし融合適性を持つ者の少なさや術者に合わせた微調整・適合検査の手間、そして何よりデバイスが術者をのっとり自律行動を始めてしまう「融合事故」の危険性・事故例が見られることから、使用者は極少数と言われている。

「リインはリインフォース？（ツヴァイ）という立派な名前があるです！人形なんかじゃありません！」

プンスカと怒るリインに、スウエンは改めて感じた。ここは、自分

の世界の常識はないと。

「いや、すまない。まだこの世界に来て2日しか立っていないのでな。善処しよう」

「あ、そうでした・・・リインも怒鳴って申し訳ないです」

と、リインがしょんぼりする。

「でもリインちゃん？いったいどうしたの？」

「はいです！もし起きていたら、スウェンさんをお連れするように言われたです！」

つまり、リインははやての所への案内役と言うわけだ。

「わかった、案内を頼む」

こうしてリインに連れられ、スウェンはやてが待つ部隊長室へと向かった。

部隊長室に着くと、昨日のなのはとフェイトに加え、二人の女性がいた。正確にはピンクのポニーテイルの女性と、赤い三つ綱をした少女だ。

「おはようございます。眠れましたか？」

「ああ、一応・・・な」

痛みで何度か起きることもあったが、今はそんなことはない。

「えっとですね、昨日の話の前に紹介します。うちの部隊の副隊長二人です」

「シグナムだ」

「ヴィータ」

二人は何やらスウエンを警戒している。スウエンはそれを少し気にしながらも、はやての話を聞くことにした。

「昨日の話だと確か、俺はこの世界に住まなければならないと言う所だったな」

「はい、それですね、スウエンさんの場合、デバイスを持っているので、管理局員、もしくは囑託魔導士というものになることができます。」

そう、ノワールを持つスウエンは通常の漂流者とは違う待遇が持たれている。なのはとフェイトが報告したその映像によって、管理局がスウエンを勧誘することをはやてに言ったとも説明される。

「どないします？管理局に入れば職にも就けますし、そのデバイスも持っていられます」

「つまり、それを拒めばノワールは没収されるということか」

「そう・・・なります」

重いはやての言葉。すると、ノワールが警告する。

『警告しますが、私はマスターが権利を失えば自動的に全ての機能にプロテクトをかけ、自爆するのであしからず』

「ええ!？」

その言葉に驚くのはなのはとフェイト。まあ、当然と言えば当然だ。ノワールのデータはこの世界では戦いの火種でしかないのだから。

「俺は夢を失った。だが、戦いをする気はない」

「そう、ですか・・・」

はやてが残念そうに顔を伏せる。すると、シグナムが前に出た。

「主はやてに嘘を言うのはやめてもらおうか」

「何・・・?」

シグナムは先ほどより一層険しい表情でスウエンを睨み付ける。

「貴様、先ほどから癖かは知らんが、すぐにでもこの場を離脱できるように位置、そして殺気。私が見逃すとも思ったか?」

そのスウエンの位置は確かにソファだがドアに近く、そして戦闘ができる場所にいる。幼少から「殺戮マシン」として鍛えられたスウエンの言わば癖のような物だ。

「そして必死に隠そうとしているが、貴様に染み付く血・・・貴

様は何者だ？」

いつの間にか起動させたレヴァンティンをシグナムは握っている。

「シグナム!？」

「答える、貴様はいったい何者だ？主はやてにも、詳しいことを話していない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この時スウエンは迷った。過去を言うか否か。スウエンの過去。家族をテロで失い、そのテロを行った組織に殺戮マシンとして育て上げられ、戦争でたくさんの人間を殺してきたこと。その戦争で殺した人には非戦闘員までもが含まれるという過去。地球軍ではその敵への排除は功績として残り、中尉と言う地位まで確立ができた。しかし、はやてにこの話を聞いた内容の中に、殺しが御法度とという話があった。つまり、地球軍で様々な敵を排除してきた優秀なエースパイロットも、この世界では大量殺戮者として扱われてしまうのである。すると、ノワールが喋り出した。

『その質問に、マスターが答える必要はありません』

「なんだと!？」

『貴女はマスターが『戦いたくない』という理由に対して『血の匂い』と言うものから警戒している。それは問題がありません。しかし、『戦いたくない』理由も聞かず、ただその『血の匂い』を理由に剣を突きつけて脅し、マスターの過去を決ろうと計る貴女に答える義務も義理もありません』

「っ！」

『さらに言えば、そのデバイスからして貴女は騎士。騎士ともある方がそのように脅しを使うとは、騎士として恥ずかしくないのですか？』

ノワールの淡々と出すその言葉に、シグナムは何も言えなかった。確かに今の現状はどうだろうか。戦いたくないという人間に対し、それとは違った態度、匂いだけで『危険』だと判断した自分は間違いない悪者だ。戦いたくないと言うのにはそれなりの理由がある。それを聞かず、知られたくない正体を脅して聞くなどは主を守るためであっても、騎士道に反することではないだろうか。

「……………そのデバイスの言うとおり、だな。悪かった」

「いや……確かに、見ず知らずの俺を疑うのは当然だろう」

『騎士シグナム』

「なんだ」

『どうせなら騎士らしく、戦いで決着を着けてみてはどうですか？』

「ノワール？」

ノワールの言葉にスウェンは驚くが、ノワールは言葉を続けた。

『貴女が誇りと戦う理由を持つように、マスターにもその誇りと理由を持ち合わせています。ならば、それらをぶつけ合い、わかればよろしいのでは？』

「……ええかもな、シグナム、スウエンさんと模擬戦してみたらどうや？それで納得してくれへん？」

「……わかりました、主がそういうのであれば」

「スウエンさんはどうですか？」

「俺は……」

この時も迷う。スウエンは戦いというものを何故か拒んでしまっていた。その戦ってきた過去。何もなかった自分の戦う理由。そして相手を殺してしまうのではないかと言う恐怖。それがスウエンを迷わせていた。

『（マイマスタースウエン、ここからはあなたが決めてください。）』

「（……俺はわからない。戦うことが怖いとも思っのか、戦う理由がないから戦えないのか）」

『（甘ったれないください。）』

「（!?!）」

突然の言葉に、スウエンは驚く。ノワールは一層強く声を上げる。

『（貴方は確かに昔とは違う。でも、その貴方のあきらめ掛けた夢のためにも、ここで戦っておくべきなんです。だから、わからないなんて言わないで……）』

まるでセレーネに怒られているようだった。強い意志と声。それはノワールであるものの、セレーネでも、おそらく同じことを言っただろう。スウエンはノワールを強く握る。

「いいだろう、受けて立とう」

こうして、二人の模擬戦が始まる。

場所を移して模擬戦をする場所へ辿り着く。すると、眼鏡を掛けた女性がそこにいた。

「初めまして！通信主任兼デバイスマスターをやってます！シャリオ・フィニーノです！」

「スウエン・カル・バヤンだ」

「私はシャリーと呼んでください」

「ああ、わかった」

フレンドリーな会話を交わし、スウエンはノワールを手を取った。どうやら、彼が戦う場所の管理をしているらしい。コンソールを叩くと何もなかった海に、廃墟が出来る。

「これは私が監修したシミュレートシステムだよ」

「すごい……」

スウエンの世界でもこんなものはない。昔機体に乗ったシミュレー

シヨンは幾度となく行つたが、触れる立体映像などは初めてだ。

「準備はいいか？」

シグナムの声に、スウエンはノワールを手取る。

「俺は星を目指すもの・・・ノワール、起動開始」

『オーライ、マイマスター。スタンバイレディ』

再びその漆黒の輝き、ストライクノワールが姿を現した。シグナムもいつの間にか騎士甲冑を纏っている。

『ではスタートします。レディー・・・ゴー!』

なのはの声で模擬戦が始まった。シグナムはレヴァンティンを構え、スウエンに突っ込む。

「はあああああああ!!!」

「・・・・・・・・!!」

スウエンはビームブレイドを構え、その人たちを受けた。

「なるほど・・・腕は確かだな」

「・・・・・・・・・・はあ!」

シグナムの攻撃を弾き飛ばし、今度は腰にマウントされたビームライフルシヨーターを構え、撃ち放つ。

「ぬっ！射撃もできるのか！」

（なぜ、俺は戦うんだ……）

戦いながら持った、スウエンの疑問だった。スウエンの中には、まだ迷いがあった。

「くっ！やるな！」

再び襲ってくるシグナムの攻撃を避けながら自分への質問を続ける。

（俺に、戦う理由なんてない。なのに俺は、なぜ戦う？）

ブルーコスモスにいたときには理由などなく戦っていた。それが命令だから、戦争に勝つためだからと、自分に言い聞かせてきた。だがその後の2年間、スウエンは戦う理由がないことから戦うことを拒んできた。

「どうした！そんなものか！」

「……あなたは何故、戦う」

「私は主を守る、そのために刃を振るう！それが私の戦う理由！」

答えながらシグナムのカートリッジが使用される。

「紫電……一閃！」

「ぐっ！（大切なものを守る……でも、守るものなど、俺にはな

い」

必死に剣を抑え、距離を保つ。

「ハア・・・ハア・・・俺は、何故・・・」

『マスター、貴方に守りたい人はいなくても、守りたいものがあるのではないですか？』

「守りたい、もの・・・」

そう言われた瞬間、スウエンは墓前で自分が言った言葉を思い出す。

（俺は・・・俺は星を目指したい！）

かつて幼いころの夢。取り戻した自分。それを守りたい。心のどこかであった、スウエンの「本音」だった。

「これで終わりだ！」

振り下ろされたシグナムの一閃。しかし、スウエンはそれを防いだ。

「何!？」

「そつだ、俺は・・・俺は！」

スウエンはその瞬間、強く決心した。

俺は、夢を守るために戦おう！

た。

「ぐっ、うう……」

「……………チエックメイトだ」

シグナムにビームブレイドを突きつける。確かに、これではもう動けないだろう。

「私の、負けだな……」

シグナムはそう一言、スウェンに告げた。その様子を見ていたなのはたちは啞然とする。

「勝っちゃった……………」

「嘘……」

シグナムはヴォルケンリッターの将であり、管理局でも名の知れた歴戦の猛者だ。そのシグナムが負ける。それは戦いを見ていたなのは、フェイト、はやて、ヴィータ、そしてシャーリーが驚いている。しかし、中でもシャーリーが一番驚いている。

「な、なのはさん……………これ」

「どうしたの？シャーリー」

「実はスウェンさんの力量測っていたんですけど……………」

そこに表示されたものに、なのはも驚きの声を上げる。

「総合評価、SSS-!？」

それは驚愕的な数値だ。総合ということは、はやてのSSよりも大きいし、何よりありえない。中でも後半で見せた空域戦闘、さらに攻撃などはSSの評価がなされている。リンカーコア率もAランク。これは人として少し異常すぎる数値だ。

「あの人、いったい何者なの・・・？」

すると、模擬戦を終えたスウェンとシグナムがやってくる。

「どうかしたのか？」

「あ、あの実は・・・」

なのははシグナムに結果を説明する。

「なるほど・・・ありえなくもないな」

シグナムは呟く。その戦いを一番近くで感じ取った彼女だからこそ言える。「彼は異常なのだ」と。

「やいテメー！いったい何者なんだよ！」

「なぜ、そんなことを聞く？」

「いいから答えやがれ！シグナムを倒して、それにこの結果！普通じゃねえ！」

「普通じゃない……か」

スウエンとしては、その自分よりも異常な人間と戦ってきたので、今少しかだけ、ナチュラルに奇異な目で見られるコーディネーターの気持ちがあつた気がした。ヴィータはグラーファイゼンを構える。

「いいから答えろ！」

「……答えるつもりはない。少なくとも、武器を構える人間に對してはな」

「てめ「いい加減にしろヴィータ」シグナム!？」

「ヴィータ、奴も背負つて物がある。詮索はやめてやれ。だがスウエン、これだけは教えてくれ。何故お前は戦うのか」

「……俺は、俺の夢のために戦うから……かもな」

「そうか」

「あの、スウエンさん」

ずっと黙っていたはやてが口を開く。

「なんだ」

「スウエンさん、機動六課に入っただけませんか？」

突然の言葉に、スウエンだけでなく、その場にいた全員が驚く。

「はやてちゃん!？」

「はやて!？」

「勿論無理には言いません。設立されたばかりの機動六課。まだちゃんと戦力が整っていないこの部隊に、是非とも貴方の力を借りたい」

「俺は・・・」

また戦う。だが、それは何もないわけではない。自らの夢を守るため、そしてこの世界で生きていくためなら、もう一度戦ってもいい。スウエンはそう思った。

「お前たちには借りもある。助力しよう」

こうして、スウエンは機動六課に協力することとなった。これが漆黒の流星に与えられた新たななる戦いの幕開けだった。

Episode 2 「黒い星の力」(後書き)

秋風「はい、今回は迷いまくりのスウエン君でした」

スウエン「まあな」

秋風「というか、どうなの？戦って」

スウエン「最初は戸惑ったが、今は夢のために戦うと誓った。だから戦う」

秋風「なるほどね・・・」

スウエン「では、次回予告か？」

秋風「ああ、お願い」

スウエン「Episode 3「複雑な世界、畏怖する少女」迫り来る機械の軍勢、蹴散らせ、ガンダム！」

Episode 3 「複雑な世界、畏怖する少女」(前書き)

すいません、タイトル変わりましたが、考えていた内容とは変わってませんので

では本編どうぞ

Episode 3 「複雑な世界、畏怖する少女」

シグナムとの戦いを終えたスウエンはシャワーを浴びると、食堂へ向かう。食事は宇宙ステーションとは違い、かなり良い食事だ。席にはフェイトが座った。なのはとまではまだ並んでいる。

「どうかな、色々あるけど」

「・・・悪くない。宇宙ステーションでは自然から作られたものなどはあまり食べられないからな」

プラントではほぼ地球と同じ環境であるので、食事もほぼ自然のものだ。しかし、宇宙ステーションでは人工的に作られたゼリーの食事も、固形のクッキーなどの宇宙食が一般的だ。しかも、一概においしいとは言えないだろう。

「あの、スウエンさんは・・・」

「スウエンでいい」

「なら私もフェイトで。スウエンはその、どこかの軍にいたの？」

フェイトの言葉に驚く。だがすぐに理解する。先ほどのシグナムの言葉を。

『お前は血の匂いがする』

「気になるか、俺の過去が」

「うづん、そんなんじゃないの。ただ、歩き方とかがなんていうか忙しい感じがしたし、この席だって、人に襲撃されにくい席だったから」

フェイトの言葉に、スウエンはハツとする。確かに歩き方も意識はしていないが軍人として徹底されたスウエンの行動は普段の生活にも現れてしまっているのだ。

「あの、気を悪くしちゃった？」

「いや、大丈夫だ。俺のことは、しばらくは言えない。だが、時が来れば……」

そこでスウエンは思う。時がくれば、自分は話せるのだろうか、こんな血にまみれた自分の過去を。そんなことを考えていると、なのはとはやてが席に座った。

「あれ、どうしたの二人とも」

「うづん、なんでもないよ」

「そう？じゃあスウエンさん、スウエンさんのお仕事のことなんですけど」

「なんだ？」

なのははスウエンにこれからのことを教える。

「スウエンさんはフォワードのメンバーと一緒に戦うことになるんですけど」

「フォワード？」

スウェンはわからない単語に首を傾げた。すると、なのはが遠くにいた子供たちを手招きした。

「この子達、フォワードは前線で戦うんですけど、スウェンさんも入って欲しいと思ひまして。こちらはスウェンさん、みんな、挨拶して？」

「スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

「エリオ・モンディアルです！」

「キャロ・ル・ルシエです。こちらはフリードリヒ」

「キュル〜！」

子供たちの自己紹介の後に見た龍に少々戸惑いを覚えた。だが、それ以上に困惑したのは・・・

「君たちが、戦うのか？」

自分より年下、しかもまだ成熟していない子供だということだ。

「……はい！」「」「」

しかし4人は特に迷うこともなく笑顔で頷いている。それがスウェ

ンには納得ができなかった。

(これも、世界が違うからなのか・・・)

そう思った。だが納得できない。この子供たちが戦うなど、もし自分がこの子達の親なら、とてもさせられない。むしろ、できない。

「・・・俺は、スウエン・カル・バヤンだ。この部隊で民間協力者になった。よろしく頼む」

「スウエンさんは色々事情があつて次元漂流者なんだけど、この部隊に協力してくれてるの。一応フォワードと戦うことになるから、よろしくね?」

「。。。はい!」

元気な挨拶の後、フォワードたちは食堂を後にした。スウエンは食事を再開したが、あまり良い表情ではなかった。

「あの、スウエン?」

「なんだ?」

「なにか、気に入らないことがあつたの?」

フェイトの問いかけ。凶星だ。スウエンは答える前に、フェイトにこんな質問をした。

「あの子供たちは、実戦経験はどのくらいなんだ?」

「まだ一回出勤したくらいだけど・・・」

「なら、今すぐにも出すのをやめるんだな。」

「え!？」

その場にいた3人は驚いた表情になる。スウエンは何を言っているのだろうか。

「あの、どうということ?」

「どうということ?それはこちらが聞きたい。何故あんな子供が戦う?」

「でも、みんな戦えるし、スバルとティアナはここに来る前は災害救助隊にいたよ?」

その言葉に、スウエンは言葉を失う。この世界、いや、時空管理局というものは何でも利用するのか、と。

「・・・・・・・・先に訓練場にいる」

そういつてスウエンは食堂を後にしてしまった。

「あ、スウエン!」

フェイトは心配になってスウエンを追いかけた。

「どうしたんやろ、スウエンさん・・・」

「スウェンさんの世界だと、エリオやキャロぐらいの子供が戦わないから驚いたんじゃないかな？」

「でも、あの驚き方は異常やったような・・・」

なんてことを考えている二人。そこから少し離れた席で、食事をしていたシグナムも立ち上がっていた。

「待つてよスウェン！」

フェイトの言葉に、スウェンは立ち止まった。

「あの、本当にどうしたの？何かあの子達が悪かった？」

「・・・何故、子供が戦場に出るんだ」

「え？」

スウェンがポツリと呟いた。フェイトはその問いかけに困った。

「あの、それはその、あの子達の意味で・・・」

「だが、戦場は死が隣り合わせだ・・・そんな場所に送り出す親など、親ではない」

そのスウェンの一言が、フェイトの心に突き刺さった。

「あ・・・」

後から追いついたシグナムもその言葉を聴いてしまった。フェイト

はうな垂れてしまっ。

「……？」

「その、私が、二人の……保護、責任者なんだ……」

スウエンは理解した、保護責任者、つまりフェイトが親なのだ。

「……」

「私は……やっぱり駄目だね。スウエンの言つとおりかもしれない」

「テストロッサ……」

シグナムがうなだれるフェイトの肩を持ち、支える。

「スウエン、お前は、何故そんなことを言える？」

「俺は……俺はそういう環境で育つたからだ」

そついい残し、スウエンはその場を立ち去つた。スウエンは何も言えなかった。あんなにも親身になってくれた彼女を傷つけてしまったのだから。

『マスター、この世界では貴方の常識とはズレがあります。彼女、フェイト・T・ハラオウンも9歳から管理局の魔導士として働いているようです』

「そうなのか……」

『一応、謝っておくべきではないでしょうか？』

「今は、そんな気分にはなれない・・・」

『そうですか・・・』

スウエンの心は今、ボロボロだった。というよりも、この自分の世界とは違う環境で心がバラバラになりそうだった。混乱する一歩手前。そんなものだろう。

「・・・訓練場、だったな」

スウエンは訓練場へ向けて歩いていった。

訓練場に着くと、既に4人の子供たちが準備運動をして待っていた。

「あ！スウエンさん！」

「・・・スバル、だったな」

「はい！」

スバルは元気よく返事をする。

「あの！スウエンさんはどんな戦いをするんですか？」

「どんな・・・と言われても」

スバルはポジションはどこなのかとか、ミッドかベルカとか、よくわからない質問を飛ばしてくる。スウェンはその質問に答えられなかったが、その代わりにノワールが答えた。

『落ち着いてください、スバル・ナカジマ』

「え？へ！？」

「ああ、こいつだ」

スウェンはその首にかかった水晶、ストライクノワールを取り出した。

『彼のデバイスのノワールです。質問にお答えしましょう、まずマスターのポジションはオールラウンダー・・・どのような戦闘にも対応できます。さらに彼はベルカとミッドの両方をハイブリットに使い分けることができます』

「へえ〜！」

スバルは感心してノワールを見る。インテリジェントデバイスとしても、なかなか高度だからであろう。すると、なのはが現れる。

「みんな、準備は良い？」

「……はい！」

「スウェン君も、いいかな？」

「ああ・・・」

スウェンはただ一言そういった。こうして訓練が始まる。ガジェット・ドローンと呼ばれる独立機動機械を相手に、4人が奮闘する。その戦闘のやり方はスウェンが驚くべきものだった。

「どう？スウェン君から見て」

「・・・そうだな、チームワークに、まだムラがある。チームプレイなら、もう少し感覚を狭めるべきだ」

「すごいですね、一回見ただけでそこまで見抜くなんて」

「まあな・・・」

今までこれ以上につらい訓練を受けてきたスウェンにとって、それを見抜くなど簡単なことだ。こうして訓練が終わり、なのはがこんなことを言い出した。

「スウェン君も、訓練してみる？」

『マスター、訓練しなければ体がなまりますよ？』

「・・・そうだな、少しだけなら、いいだろう」

こうして、スウェンも訓練をすることとなった。いつの間にか、ギヤラリーにはシグナムやヴィータも来ている。

「では、準備をお願いします」

『了解した・・・俺は星を目指す者・・・ストライクノワール、起動』

『マスター、AMFと呼ばれるフィールドです。』

「AMF?」

『簡単に言えば、魔力を無効化するフィールドです。マスターのビームライフルはマスターの魔力が源。電気エネルギーではありません。ちなみにAMFは発動してからタイムラグが数秒発生します。』

「なら、数で押し通す!」

スウエンはバックステップを取り、ビームライフルを連射する。連射は魔力の消費が激しい。だが、スウエンはノワールのサポートによって魔力はコントロールされている。すると、その多重に発射されたビームがガジェットを貫通する。

「すごい・・・」

上から見るスバルはただその一言だった。エリオとキャロも、ただ驚いてみている。

「二丁銃かぁ・・・なんかティアと同じだね」

「・・・え?ええ、そうね」

ティアナは呆然としていたためスバルの言葉の反応に遅れていた。

(なんて、すごい戦いをするんだろう)

その攻撃方法、身体能力、その全てが驚くものばかりだった。する

と、ガジェットがスウェンに突っ込む。

「チィ！」

スウェンは腰にビームライフルシューテーターを戻すと、ビームブレイドを抜いた。それでスウェンは斬りかかる。

「おおおおおおおおお!!!!!!!!」

一度はかき消されたが、瞬時に現し、ガジェットを切り裂く。しかし、残りのガジェットが迫る。

「・・・ノワール、リニアレールガンだ」

『オーライ、照準セット』

「消し飛べ」

MAU-M3E4 2連装リニアガンが展開され、収束された魔力弾が連続で発射される。その強力なレールガンによって、ガジェットが全て吹き飛ばされた。

「す、すごい・・・」

「あの翼は射撃兵器にもなるとはな・・・」

「あいつ、やっぱり強い・・・」

3人の隊長組は驚き、フォワードも驚き、目をキラキラさせていた。しかし、ティアナは違った。

「なんなのよ、あれ・・・」

異常な強さ、攻撃。その全てがティアナにはありえないと思った。その黒く輝きを持つ機体は、ティアナに驚きと脅威プレッシャーを与えていた。

Episode 3 「複雑な世界、畏怖する少女」（後書き）

秋風「はい、と言うことで今回はちょっと怒ったスウエン君でした」

スウエン「君をつけるな、虫唾が走る」

秋風「ごめんなさい」

スウエン「それにしても、子供が戦場に出る・・・か」

秋風「今のスウエンなら怒るよね」

スウエン「まあな・・・」

秋風「まあフェイトとの関係は潰れないから大丈夫だよ」

スウエン「なにが大丈夫なんだ」

秋風「それは次回に期待」

スウエン「なんだかな・・・」

秋風「では、いつものどうぞー！」

スウエン「次回、Episode 4『ホテル・アグスタ』悲しみの連鎖、断ち切れ！ガンダム！」

Episode 4 「ホテル・アグスタ」(前書き)

今回はヴォルケンリッターとティアナが主軸の話です

では本編どうぞw

Episode 4 「ホテル・アグスタ」

スウエンが機動六課に勤めることになって早くも2週間が経った。現在はホテル・アグスタと呼ばれる場所に行くため、フォワード、そして隊長たちとヘリの中にいた。

「ほんなら、改めてここまでの流れと今日の任務のおさらいや。今まで謎やった、ガシエットドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男。」

そういうと、はやてたちの前に、一人の男の映像が現れる。

「広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める。」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応、覚えておいてね？」

「「「「はい！」「」」」」

と、話を引き継いだフェイトの問いかけに、フォワードメンバーが返事をする。すると今度はラインが画面の前に飛び、画面が切り替わった。

「で、今日向かう先はここ！ホテル・アグスタ！」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが、今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガシエットが出てきちゃう可能性が高い、とのことで、私たちが警備に呼ばれたです！」

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、油断は禁物だよ。」

「現場には昨日から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長他、数名の隊員が張ってくれている」

そんな説明を終えると、キャロがなにやらシャマルの足元にある4つの箱を気にしていた。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど・・・その箱、何ですか？」

シャマルの足元には、4つの箱が、忠実な召使いのようにじっとしていた。

「ああこれ？これは、隊長達とスウェンさんのお、し、ご、と、着」と、シャマルは意味ありげに笑った。

それからしばらくして、スウェンたちはホテル・アグスタへと到着した。ミッドチルダの有名な富豪達が揃う中、4人の人物が受付に姿を現した。そして、受付の男性はそれを見て、驚く。

「こんにちは、機動六課です。」

はやて、なのは、フェイトのドレス姿。そして、後ろにはスウェン

がタキシードを着こなし、そこにいた。シャルルの仕事着とはこのこと。4人は中の警備として入るため、このようにドレスなどを着て、怪しまれないようにしている。それぞれ分かれホテルの中を見て回ることとなった。スウェンはフェイトとロビーを見回ることになる。

「……………」

二人は無言だった。それも当然だ、前回あんな気まずいことが起れば、そうなるのも当然だろう。

「あの……………」

声をかけようとするも、重なってしまう。

「なんだ、フェイト」

「う、ううん！スウェンから……………」

「……………その、すまなかった。この前は心にもないことを言ってしまった。自分の世界とこの世界が違うという認識をちゃんと取れていなかった。」

「ううん、スウェンは、正しいよ……………」

フェイトは一拍置いて、しゃべり始める。

「あの子達ね、いろんな事情で家族や一族に見捨てられて、大人に不信感を持つちゃったの……………」

エリオとキヤロ、普段からあんなふうニコニコと笑っているのは最近になってのことだった。

「でも、私を信頼してくれて、親になって、あの子達は・・・私の力になりたいって言ってくれた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その時のフェイトの表情は嬉しそうでもあり、悲しそうでもあった。

「でも、スウエンに言われてから思ったの。私は本当に」

あの子達を救えたのになって

どんなに美化しても、戦場に救った子供を出せば、利用していると
同じだ。言い方がどうあれ、それは真実だ。

「だから、私は・・・・・・・・」

「心配するな」

「え？」

「俺が、あいつらも、お前も守る。それでいい」

「スウエン・・・・・・・・」

スウエンの過去・・・テロで失った家族。戦いの兵器となった自分。それはちょうどエリオたちくらいの時だった。だからこそ、スウエンはエリオたちを守りたいと思った。二人を心から愛そうとするフ

エイトも。スウエンの言葉に、フェイトは顔を赤くした。

「その、スウエン・・・ありがとう」

「・・・ああ」

こうして、二人は廊下を歩いていった。

場所を移し、ホテル・アグスタ前。外にはティアナが待機し、スバルも入り口のエントランスにいた。

(でも今日は・・・八神部隊長の守護騎士団全員集合かぁ・・・)

(そうねえ・・・あなたは結構詳しいわよね。八神部隊長とか副隊長長のこと)

(うん・・・父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど、八神部隊長の使ってるデバイスが、魔導書型で、夜天の書つていうこと。副隊長たちと、シャマル先生、ザフィーラが、八神部隊長の所有する特別戦力だつてこと。で、それにライン曹長合わせて6人で無敵の戦力つてこと。まあ、八神部隊長たちの詳しい出自とか、能力の詳細は特秘事項だから、あたしも詳しくは知らないけど・・・)

(レアスキル持ちは皆そうよね・・・)

(ティア、何か気になるの?)

(別に・・・)

（そっか、所でティア。ティアって、スウエンさんのこと嫌いなのかな？）

（え？何でよ？）

突然話題が変わり、スバルの質問にティアナの声が若干変わった。

（なんか、ティアって、気づくといつもスウエンさんのこと睨みつけてるし・・・）

確かに、今日のヘリでの説明のときも、ティアナはスウエンを睨みつけていた。

（そんなんじゃないわよ・・・ただ・・・）

（ただ？）

（なんでもないわ。通信切るわよ。）

（あ、ちよっとティア・・・）

スバルが言い終わる前に、ティアナは通信を切った。そして、ティアナはさっきの話を考えていた。その部隊長たちの戦力は、スバルは無敵と言ったが、ティアナからしてみれば、機動六課の戦力は無敵を通り越して異常だった。明らかにロストロギア保護だけが目的でない。そんな感じがした。そして、ティアナはもう一つ気にしていることがあった。

「やっぱり、凡人はあたしだけか・・・」

フワードでも危なっかしくはあるが、才能の塊で、優しい家族のバックアップを持ったスバルに、九歳にしてランクB級を持つエリオ。さらにレアスキルを持ち、強力な竜召喚を持つキャロ。自分だけ平凡で、凄い所などない。さらに言えば、先日民間協力者として迎えられたスウェンも、自分達が苦戦するガジェットを倒した強さ。それが、ティアナがスウェンを気に入らない理由なのかもしれない。すると、突然屋上にいたシャマルが叫ぶ。

「クラールヴィントのセンサーに反応・・・シャーリー！」

『了解です！』

「シャマル先生！前線の様子、私にも見せてください！」

「わかったわ。クラールヴィント、お願いね」

『はい！』

現時点で確認されている敵の数はガジェットドローン陸戦1型が35機、陸戦3型が4機となっていた。シグナムはエリオ、キャロにティアナの指揮でホテル前での防衛ラインの構築を指示し、シャマルは現場の指揮を務めることになった。

「新人どもが相手をするまでもねえ！ここで潰す！」

「お前も案外過保護だな。」

「うつせえ！」

そう言ってヴィータがアイゼンを握り締める。

「行くぞ、アイゼン！」

《Jawohl》

ヴィータは自分のデバイス・グラーファイゼンに声をかけるとアイゼンはそれに答える。そして、自分の周囲に八つの魔力スフィアを生成し、赤いベルカ式の魔法陣を展開するとアイゼンを構える。

「まとめて……ぶち抜けええええっ！！！！！」

ヴィータはガジェットの大群に得意の魔法の一つくシュワルベ・フリーゲン>を放ってガジェットを撃破しようとする。ガジェットの群れもAMFを展開して防ごうとするが、魔力効果を打ち消しても、物理的な衝撃の効果は防ぎきれず、撃ち貫かれて爆発する。その後方から今度はガジェット？型が出現するが、その行く手をシグナムが塞ぐ。

「レヴァンティンツ！！！」

《Explosion!!》

シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードし、剣に炎をまとわせる。

「紫電……」

シグナムは剣を構えて突撃しようとしている所に？型はケーブルを出して捕まえようとするが、シグナムはその場から飛び上がる。？型はさらにアームで迎撃しようとする。

「・・・一閃ッ!」

シグナムは？型の反撃に怯むことなく、アームごと？型を縦一閃に斬り裂いた。そして崖沿いの別ルートで接近していたガジェットの目の前にザフィーラが立塞がり、ガジェットは攻撃を仕掛けるがザフィーラの防御魔法で攻撃が通らない。

「ここは通さん・・・でりゃあああああつ!!!」

ザフィーラの雄叫びと共に地面から白い槍状の突起物がガジェットを貫いて動きを止める。そしてザフィーラはもう一度雄叫びを上げると崖側面から突起物を出現させてガジェットを十字に貫いて破壊する。その様子をスバルとティアナは通信画面越しに見ていた。

「副隊長達とザフィーラ・・・すごい!」

「これで・・・能力リミッター付き・・・」

スバルは驚きで声を上げていたが、ティアナは彼らの実力に劣等感を覚え、拳を握りしめていた。

(でも負けない!証明して見せるわ。ランスターの強さを!)

こうして、フォワードの戦いが幕を開ける。

しばらくの戦闘が続いた。ティアナはフォワードで固まり、攻撃を続ける。しかし、ティアナは一人イラついていた。そして・・・

『ロードカートリッジ!』

ティアナは数発のカートリッジをロードする。

「ティアナさん！無茶ですよ！」

「大丈夫！」

（証明するんだ！私の強さ・・・！）

「クロスシフトB！行くわよスバル！」

「おお！」

スバルが返事をし、突っ込む。そしてティアナも砲撃体制に入った。

「クロスファイアー・・・シューツト！」

魔法弾が発射され、次々とガシエットに命中していく。それを見て安心感を覚えたティアナだったが、それがいけなかった。一発だけ、弾丸がそれていた。それはまっすぐにスバルに向かっていく。

「スバル！」

それに気づき、ティアナが叫ぶ。しかし、それも虚しく爆発が起きた。

「あ、ああ・・・！」

ティアナがひざを突く。しかし、スバルは無事だった。そこにいたのは黒い輝きを見せる姿。ストライクノワールがあった。

「スウエンさん・・・？」

「大丈夫か、スバル」

「は、はい！」

すると、ヴィータが飛んできた。

「ティアナ！この馬鹿！味方撃つてどうすんだ！」

「副隊長・・・その、これはこういう作戦で・・・」

スバルが弁解するが、ヴィータは怒鳴ることをやめない。

「何が作戦だ！直撃コースだよタコ！もういい！「まで」！？」

「これ以上は時間の無駄だ。ガジエットの増援が来ている」

「何！？」

ヴィータもスウエンと同じ方を見た。確かにガジエットが迫っている。

「・・・スバル」

「はい！」

「ティアナが行ったことは間違いなく仲間の命を危険にさらした。弁解の余地はない。」

「で、でも、あれは私が！」

「あいつをかばっても、あいつの誇りが傷つくだけだ」

「っ！」

スウエンの言葉に、スバルが押し黙った。スウエンは膝を突くティアナを見た。

「スターズは裏手に回っている。あれではもう戦えん」

「………はい」

こうして、スターズは裏手へと引っ込んでいった。

「スウエン・カル・バヤン！ストライクノワール、出る！」

バーニアを吹かし、スウエンはガジェットの群れへと突っ込んでいった。

しばらくして、戦闘は終了した。守護騎士、そしてスウエンの活躍により敵は全滅した。今回はおそらく出されていたロストロギアに反応したのだろうと結果が出た。ここはホテルの裏手。そこでティアナは壁に手を着き、スバルはオドオドとしていた。

「ティア、向こう………終わったみたいだよ？」

「あたしは、ここの警備やってるから。アンタはあっち行きなさい

「よ」

「…………あのね、ティア」

「いいから、行って」

「ティア、全然悪くないよ！ あたしが、もっとしつかり」

「行けつつってんでしょ!？」

最悪だった。スバルはティアナを思って言っているのに、ティアナには八つ当たりしかできなかった。今は誰にも関わって欲しくない。それがティアナの本音だった。

「う、ごめんね。また…………後で、ね？ ティア」

スバルが走っていく足音が聞こえる。それは寂しい音だった。悪いと思う気持ちはある。今はホツとした気持ちのほうが強いティアナ。

「あたしは…………」

あれだけやったのにもかかわらず出なかつた練習の成果。相棒を傷つけそうだった自分の無力さ、それがティアナにのしかかった。

「あたしは…………!!」

ティアナはこの誰もいない裏手で、精一杯泣いていた。

Episode 4 「ホテル・アグスタ」(後書き)

スウエン「今回は短かったな」

秋風「しょうがないじゃん」

スウエン「駄目作者」

秋風「なにおう！」

スウエン「それにしても、ティアナが危なかったな」

秋風「スウエンはどうやってあそこまで？」

スウエン「シャマルから連絡を受けて飛んだ。そしたらあそこに遭遇しただけだ」

秋風「さて次回は・・・」

スウエン「この次回予告の魔王とはなんだ？」

秋風「次回わかるよ」

なのは「魔王じゃないもん！」

秋風「そんなこと言ってるのはお前だけだよ。スウエン、よろしく」

スウエン「次回、Episode 5 「虚しい空」狂気の魔王、撃ち破れ、ガンダム！」

なのは「だから魔王じゃないってばー！」

Episode 「虚しい空」 (前書き)

久しぶりの投稿です。すいません

すごく駄文になりました。でも見ていただけたら幸いです

では本編どうぞ

Episode 5 「虚しい空」

戦闘が終了し、現場検証も終了。スウエンたちは隊舎に戻った。ここでウィータはティアナについての疑問をなのはにぶつけた。するとなのはは語った。ティアナの悲しい過去を。ティアナの家庭に親はいない。兄との二人暮りだったという。兄、ティード・ランスタ―は当時航空部隊のエリートだった。その兄の姿はティアナの憧れだった。しかし、神はティアナに残酷な運命を与えた。兄の殉職。当時違法魔導士を追っていたティードは一人で向かったため、そこで返り討ちにあってしまった。そして、葬儀の時に兄の上司が発した、無能の一言。殉職した隊士に向かつて「首都航空のエリートでありながら、犯人を取り逃がしたのは失態」と言い放ち、更には「例え死んでも任務を失敗するような役立たずは・・・」などと言ったらしい。当時10歳だったティアナにとっては、それはあまりにも深く残った傷であった。この時スウエンは思った。

もしかしたら、彼女も自分と同じ苦しみを持っているのかもしれない

その日の夜、スウエンはティアナが自主練習をする場所へと向かった。するとそこから知った顔が歩いてきた。

「ヴァイス」

「よう、スウエン。どうしたこんな夜中に」

「・・・理由はわかるだろう？」

「まあな」

と、互いに苦笑する。スウェンとヴァイスは年齢も近いことと、数少ない男性局員ということで仲が良い。

「ティアナは？」

「全然駄目。耳を傾けもしない」

「わかった。後は俺が引き継ごう」

「ああ、頼んだぜ？」

ハイタッチして、スウェンはティアナのところへ向かった。

ティアナは一人、命令無視をして訓練をしていた。

「何をしている、ティアナ」

「っ！スウェン、さん」

「もう消灯時刻は過ぎている。休まないと体に毒だ」

「大丈夫です。それに私特訓しないといけないんです。凡人なもので」

ティアナはスウェンの忠告を無視して訓練を続ける。

「なのはには、休めといわれていたはずだ。これは立派な命令違反だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なのはに報告をしてもいいんだぞ」

「それは、やめてください・・・」

ティアナが動きを止め、スウェンの方を見た。

「何故無駄だとわからない？」

「そんなの、わからないです。私はみんなより強くないと・・・」

「強くなってどうする？兄を見返すために力を得るか？」

「どうして、それを・・・」

ティアナの表情が険しくなった。

「悪いがなのはから聞いた。お前の夢は執務官になることらしいな」

「それが、何か・・・？」

「・・・・・・・・覚えておくことだ。力に飲み込まれたとき、人は夢を失う」

そう言ってスウェンは隊舎の方向を向く。

「そしてもう一つ。戦場でお前のように上官の言うことを聞かない奴は早死にする。しかも、周囲を巻き込んでな。そうしなくては、休むことだ。」

スウェンは隊舎に戻った。ティアナはそんなスウェンを睨みつけていた。

それから数日、今日はなのはとフォワードがチームごとに戦うこととなった。

「あ、もう始まってるんだ」

フェイトが遅れてきた。本来ならフェイトがスターズを相手にする予定だったのだが、フェイトはデスクワークで遅れてしまっていた。

「本当はスターズは私がやろうと思ってたのに……」

「あいつ最近無理しすぎだ。休ませねえと」

ヴィータも唸るように言う。スウェンは小さくヴィータに呟いた。

「ヴィータ、ティアナをどう思う?」

「いつもよりキレがねーな……どうしたんだ?」

ヴィータの言うとおり、クロスシフトにまったくキレがない。さらに言えば、先ほどからスバルがなのはに突っ込んでばかりだ。しかもそれはティアナお得意の幻術ではない、スバル本人。

「スバル！駄目だよそんな危ない軌道！」

「すみません！でもちゃんと避けますから！」

スバルが別のウイングロードでなのはから離れる。ティアナの姿が見当たらないのでスウェンは探す。すると、ティアナはビルの向こうで砲撃を放とうとしていた。

「ティアナが砲撃を・・・!?」

作戦としては確かに間違っではないが、これではスバルが危なすぎる。フェイトたちの心配を他所に、スバルはなのはのアクセルシユートを避けながらなのはに突っ込む。

「でりやあああああ!!!!!!」

スバルが攻撃するが、なのはの防御魔法に阻まれる。その瞬間ティアナの姿が消えた。

「あれは幻影!?!」

「じゃあ本物は!?!」

ライトニングの二人が驚く。ティアナはウイングロードを走り、カトリッジをロードしながら魔力刃を出し、なのはに突っ込んだ。

「一撃必殺！でええええい！」

ティアナの特攻。その瞬間だった。

「レイジングハート・・・モードリリース」

『オーライ』

レイジングハートが元に戻り、なのはは魔力の刃を白刃取りで受け止めた。

「おかしいなあ・・・二人ともどうしちゃったのかな？頑張っているのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

「あっ！？なのは・・・さん？」

二人の声が震えている。ライティングも驚いている。

「練習のときだけ言うこと聞くフリして、本番でこんな危険な動きしたら、練習の意味、ないじゃない・・・」

なのはが顔を伏せた。そしてその虚ろな目でティアナを見る。瞬間、ティアナが離れ、再びカートリッジをロードした。

「私は！傷つけないから！もう無くしたくないから！」

ティアナが泣き叫ぶ。自分の思い、力の証明、ティアナが暴走する。

「だから強くなりたいんです！」

なのはが目を瞑った。そして殺気を込めたような単色となった黒い瞳でティアナを見た。

「少し、頭冷やそうか……」

なのはの足元に魔法陣が展開された。そしてティアナに人差し指を向ける。

「クロスファイアー」

右手に魔力弾が精製された。

「うわあああ！！ファントムブレイ！」

「シユート」

ティアナの攻撃は不発。そしてなのはのクロスファイアーがぶつかった。

「ティア！」

スバルが行こうとするが、バインドで止められた。

「バインド！？」

「スバル、よく見ていなさい」

言った瞬間、ティアナにまたしてもクロスファイアーが発射された。それがティアナに迫る。しかし、それはティアナには当たらない。そこにあるのは黒い流星だった。

「スウエン、さん……」

「言っただろう、戦場で自分勝手なことをすれば無駄死にをす」と

スウエンは言いながら手刀でティアナをなぐり、気絶させた。

「なんのつもりかな？スウエン君？」

「……それはこちらが聞きたい。お前は、何をしている？高町なのは」

「教導だよ？どいてくれない？」

「……お前は間違っている。お前は、ティアナを戦場で殺したいのか？」

「どういうことかな？」

なのはがスウエンを睨みつける。スウエンは冷静なのはを見る。

「戦場で、上官の命令を聞けない人間はすぐに死ぬ。だがな、戦場に向かう自分の部下を死に追いやるような真似は、許されることではない。何故、お前らは互いを理解しない？」

スウエンはまるで自分に問いかけるようだった。ナチュラルとコーディネーター……それが分かり合うのと同じように、上司と部下も、わかりあうことは必要になる。

「スウエン君も、私の邪魔をするんだね」

なのはの足元に魔法陣が敷かれる。そして、スウエンもビームライフルシューティーを構えた。

「スウエン君も、頭冷やそうか」

「スウエン・カル・バヤン、ストライクノワール、出る！」

こうして虚しい空で、二人の戦いは始まった。

「はあっ！」

スウエンがビームライフルを放つが、なのははそれを防ぐと、アクセルシューターを発射する。

「この程度……」

「甘いよ？」

スウエンがよけるが、それはスウエンを追ってくる。

「追尾……！」

スウエンの世界でも、ミサイルなどに追尾機能はあるものの、ビーム兵器にはこういったものは見られない。OSで固定し、出力などを算出。そして目標に撃ちだす。でなければ攻撃は当たらない。

「ちいっ！」

スウエンはビームブレイドを抜くと、それを引き裂いた。

「やるね……」

なのはは感心しながらもスウエンに攻撃を繰り返す。今のなのはに

は「敵を墮とす」この一点しかないのだ。

「ノワール！」

『了解、出力最大！』

スウエンはなのはに斬りかかる。しかしなのははレイジングハートの形状を変え、砲撃を発射した。

「デイバイイン・・・バスターアアア！」

「ぐう！」

スウエンはそれを間一髪で避ける。このままでは拉致があかない。

(・・・どうする？どうすれば対応できる？)

『マスター、ありますよ？唯一の対抗手段が』

「なに？」

『お忘れですか？105シリーズに搭載された、唯一の機能を』

ノワールは意味ありげな言葉をスウエンに告げた。

デイバインバスターによってしたに墜落したスウエンをフェイトは慌てて見る。先ほどから念話で呼びかけているのだが、まったく反応がない。

「スウェン！」

すると、煙から砲撃が放たれた。なのはも驚いて見る。スウェンの武装に、こんなものはなかった。次第に煙が晴れ、そこにあったのはいつものノワールの姿ではなかった。白いPS装甲、そして肩にはミサイルランチャ、さらに左腕には巨大な銃がもたれていた。

「あれは・・・!?」

スウェンの姿に、全員が驚愕する。

「へえ、そんなもあるんだ」

「105シリーズ唯一の機能。ストライカーパックシステム・・・土壇場で何とかなるとはな」

スウェンは再び空中に上がり、なのはを見る。

「見たところチャージに時間がかかるみたいだね。そんなんじゃない私には勝てないよ?」

「・・・そんなこと、百も承知だ・・・ノワール！」

『パック換装、ソードストライカー』

主力装備の銃「アグニ」が消え、レーザー対艦刀「シュベルトゲベル」が姿を現した。

「っ!」

「おおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

スウェンがその対艦刀を振り下ろす。なのははそれを避けて距離をとったが、左手から発射されたロケットアンカーに捕まる。

「しまった!？」

「なのは、もういいだろう。」

「え!？」

スウェンのいきなりの言葉に、なのはは驚いた。

「お前は確かに間違っではない。だが、お前の今の悲しみは……
……本当にティアナにぶつけるべきだったのか？」

「っ!」

「苦しみは、一人で抱えては何にもならない。」

スウェンの言葉に、なのははレイジングハートを降ろした。スウェンの言葉を受けたからだろう。もうなのはに、戦闘の意思はなかった。

模擬戦はその日で終了となった。その時、ガジェットの編隊が現れたが、スウェン、フェイト、シグナム、ヴィータでこれを迎撃し、ガジェットを撃破した。なのはは出撃の許可を求めたが、スウェンはこれを認めなかった。

『想いは伝えなければ意味がない。お前の本音、あいつらに教えてやれ』

こうしてなのははフォワードに「教導」の理由を話した。スウエンは今、自分の部屋にフェイトといた。

「ねえスウエン？」

「なんだ、フェイト」

「ありがとね、なのは……助けてくれて」

「いや……」

スウエンも聞いた。なのはの「教導」の理由を。スウエンはただ、「そうか」といつて聞き流した。戦闘の重度の負傷など、仲間でも人もいた。この世界ではそれが無い。いや、「死」という概念が薄すぎるのだ。だからこそ、ティアナが自分の兄が死んだのにも関わらずティアナは「死」というリスクを背負って訓練をしていた。すると、ドアがノックされた。そこにいたのはなのはだった。

「遅くにごめんなさい」

「どうかしたのか？」

「あれ、なのは？」

二人が驚いてなのはを見た。

「その、一言謝りたくて……」

「別に気にするな」

スウェンは言いながらコップにコーヒーをついでなのはに渡した。

「お前が、これからあいつらの支えになればいい。そうすれば、俺のようには……」

「え!？」

「っ!」

つい、口が滑ってしまった。スウェンは後悔した。フェイトがこんなことを言い出したからだ。

「あの、スウェン」

「なんだ？」

「教えてくれないかな、スウェンの、過去……」

今、一人の戦闘機械の記憶が明かされる……

Episode 5 「虚しい空」(後書き)

今回はお休みです

スウェン「次回、Episode 6『消えない傷』過去を縛る鎖、
断ち切れ、ガンダム！」

Episode 6 「消えない傷」(前書き)

久しぶりの更新です。覚えてる人がいるか不安です……

Episode 6 「消えない傷」

フェイトの言葉に、スウェンは数秒の沈黙をした。やがて目を開き二人に向き直った。

「……………いつかは、話さなければいけないことだ。いいだろう」

『しかしマスター……………』

「気にするな。だが……………」

スウェンは扉を開けた。そこにいたのは……………

「盗み聞きは、感心しないな」

「あ、あはは〜」

そこにいたのははやてを筆頭にヴォルケンリッター、フォワード、シャーリー、ヴァイスがいた。

「もう、隠す意味もないだろう」

こうして、スウェンの過去が明かされる。

ここはティアナがなのはの過去を聞いたロビー。スウェンはノワールをつなぐ。ノワールによると、その今までの歴史の記録、スウェンの過去と記憶は映像としてインプットされているのだという。

「では、話をしよう・・・ノワール」

『イエス、マスター』

そこに映し出されたのは一人の男性の写真。スウェンの世界で知らない者はいない。男の名をジョージ・グレン。そう呼ばれた男だった。

「この人は？」

「この男、何か変わったところはないか？」

「特に、見当たらないけど・・・」

それも当然だ、中身を見なければジョージ・グレンもただの人となる。

『僕は今、僕の秘密を話そう・・・僕は自然ナチュラルに生まれた者ではない・・・』

「え!？」

フェイトがノワールの言葉に声を上げる。

「そう、この男は普通の人間ではない。この男は、コーディネーターだ」

「コーディネーター？」

スバルが首を傾げる。

『マスタースウエンの世界には、二つの人種が存在します。地球に
なんの変哲もなく生まれる人間、ナチュラル。これは貴方たち普通
の人間を指します。そしてコーディネーター・・・これは、人間が
生まれる精子、卵子の状態に遺伝子を組み替えて遺伝子操作を加え
ること、重篤な先天的疾患、障害の除去はもとより、意図的に知
能や運動その他の能力の拡大を図り、「自然に生まれた者達より、
多くの力を持てる肉体と、多くの知識を得られる頭脳を持つ」とい
うコンセプトで生み出された人間のことです』

「どづいつこと?」

「例えば、子供を生む母が天才的なピアニストだとしよう。その才
能は遺伝子によって決まっている。ならそれを子供に受け継ぎたい
としたら?」

「同じ、遺伝子に操作する・・・?」

「そのとおり」

スウエンは頷く。全員それに驚いた。ミッドにはこんな技術は確立
されていないからだ。ノワールは次の映像で、モニターで生まれて
くる子供の目や髪の色を設定する場面を写す。

「こんな、ことが・・・」

「でも、スウエンさんの過去とどう繋がってるんや?」

『それも、今からお話しましょう。ですが・・・』

「フォワードは退出を勧める」

「……え!?!」「」「」

フォワードが首を傾げる。なのはたちも、少し不安そうにスウェンを見た。

「俺を知る仮定で、お前らに覚悟があるならこれを見ることを許すが、どうする?」

スウェンの言葉に、フォワードの4人は強いまなざしでスウェンを見た。どうやらリタイヤしないということらしい。

「わかった。ノワール」

『イエス、マスター』

次に映し出されるのは、町で銃撃戦を行う人々の映像だった。キャ口などは驚いている。それはなのはたちも同じだった。

「先ほど話したナチュラル、そしてコーディネーターだが、やはりこれでいざこざが起きる」

『ナチュラルはコーディネーターを妬み、逆にコーディネーターはナチュラルを卑下するようになったのです』

あらゆるテロなどが映し出される。

「そして、これは戦争に発展した」

『地球連合という軍部組織。そしてプラントと呼ばれる場所にある軍部組織ザフト。この二つが戦争を始めました』

それは本格的な戦争。なのはたちからしてみれば、戦争の映画を見ているようだった。

「そして、ある出来事で、状況が一変した」

「ある出来事？」

「地球連合軍の中にある思想主義『ブルーコスモス』これによって地球連合は警告の意味で核を一つのプラントに撃ち込んだ」

『!?!?』

全員がその光景に驚いた。そこで生活していた人たちがいるのも関わらず、その爆弾は爆発し無残にも弾け飛んだ。

「酷い……」

「そして、プラントにあった一つの作業用巨大ロボット『モビルスーツ』が、戦場の主役になった」

ザフトのジンが地球軍を次々と制圧していく。降伏した人間さえ、ジンはガトリングを撃ち放った。それを見た数名が目を背ける。

「当初、連合はこれにより劣勢を強いられた」

「何故だ？核を持っていたのだろうか？」

「ザフトは、Nジャマーと呼ばれるものを開発した。」

それは核を使用不能にする粒子のことだ。これにより連合は劣勢を強いられた。

「だが連合も、地球製のMSの開発に成功する」

そこにはストライクが映っている。ストライクが立ち上がり、戦場を駆け抜ける。

「これ、スウエンさんが？」

「いや、これはストライク・・・ノワールはこれの再生機として作られている」

映像が変わっていき、戦いがどんどんMS同士の戦いへと変わった。新たなMSが現われては消え、現われては消える。そんな戦いが続く。そんな中でフェイトはスウエンの言葉の意味にようやく気がついた。

「もしかして、スウエンは・・・」

「そう、俺は元地球連合第81独立機動軍、通称『ファントムペイン』中尉だ」

「!?!」

全員が驚愕し、フェイトは気づいた。何故スウエンがここまでエリオやキャロが戦うことに反対をしたのか。戦争を経験している人間からしてみれば、スウエンがエリオとキャロについて反対するのも当然だった。

『では、マスターの過去を、いよいよご覧いただきましょう』

そこに映し出されたのは幼少のスウエン。それは何の変哲もない少年として生まれ、普通の家庭で育つ。優しい父や母と共に天体観測をするスウエンの姿。スウエンの笑顔は、本当に幸せそうなものだった。

「幸せそうですね」

エリオの言葉に、一同が納得する。そう、家族のぬくもり。平和な日々は過ぎていく。

「だが、運命は残酷だった」

『マスターの父は宇宙開発に携わる仕事をしていました。』

「それによって、『ブルーコスモス』のテロにあった」

次に現れたのは炎と瓦礫の中で、親にかばわれて気絶をするスウエンの姿だった。

「そんな・・・」

「そして、俺はブルーコスモスの施設へと預けられた」

「え！？だって、スウエンの親を殺したのは・・・」

「当時のブルーコスモスは、コーディネーターに対抗するあらゆる非人道的なことを行ってきた。実験動物は孤児が最適だったんだろ」

モルモット

う。」

映像に映し出されるスウェン。検査を受け、そしてさまざま人殺しの術を学ばされる。中には酷い映像を半無理やり見せられるシーンがあつた。そして成長していくにつれ、スウェンの表情に笑顔というものが消えていった。キャラは耐え切れず目を逸らす。

「そして俺はファントムペインとして戦場に出た」

それはスウェンが操り戦うストライクノワールだった。他のMSであるヴェルバスター、ブルデュエルと共に、ジンやシグー、ザク、あらゆる人が乗ったMSを撃破していく。さらには難民キャンプに降り立ち、ガトリングが放たれ人々が血を撒き散らして死んでいく。全員の顔が真っ青になっていく。当然だ。こんなリアルに人が死ぬことなどめつたにないのだから。

「そんな、こんなことが・・・」

「そして戦争末期、俺はある宇宙ステーションのMSの奪取を命じられた」

スターゲイザー・・・そう呼ばれるモビルスーツの捕獲。そしてノワールが戦う中で、アストレアが次々と撃破されていく。だがそこを駆け抜ける一機のMS・・・星を見つめる者、スターゲイザー

「誘い込んだつもりか・・・？」

「っ！ノワール!？」

『すいません、音声が混ざっているようです。』

それは戦いの記憶。そして悲しき戦い。場面はうつり、相撃ちのシーンが終わる。

『……………ここはどこだ？』

『さあ？ただ地球と金星の間はどこかね』

「この人は？」

「DSSDのスターゲイザー計画の責任者、セレーネ・マクグリフ。俺を助けてくれた女性だ」

「声がノワールと同じ？」

『いいえ、スバル・ナカジマ。私が彼女の声を複製したのです』

そんな会話をしていると、場面は移り変わっていく。

『ノワールにももうエネルギーは残っていない。この流れを止めるので精一杯だろう』

あの時はエネルギーもなく、本当に死を覚悟していた。

『大丈夫、帰れるわ。必ず』

『どうして俺を助けた？』

『……………寂しいから。眠るまで、誰かに声を掛けて欲しかった』

ゆっくりと稼動するスターゲイザー……スウエン、そしてセレーネがコクピットに座る。

『スターゲイザーは、最初の一分では数センチしかすすまない。でも、それがだんだんと加速して、一時間では数十キロの地点に到着する。星を見るもの……スターゲイザー……大丈夫よ、帰れるわ、必ず』

そして、スウエンも目を閉じた。また、場面が移る。

『貴方は……どうしたいの?』

セレーネがビールの缶を潰し、杖をついたスウエンを見た。それは優しい母のような目だった。

『俺は……俺は星を目指したい!』

映像のスウエンが、声を絞るように吐き出した。このときこそ、スウエンが争いの輪廻から抜け出した日でもあった。

「……これが、俺の過去だ」

話が終わってから、みんなが涙を流していた。シグナムでさえ、目を紅くしている。

「……うっぐ、えっぐ」

「何故、お前達が泣くんだ?」

スウェンには理解できない。何故、六課のメンバーが涙を流すのか。

「だって、悲しすぎるよ……スウェン」

フェイトは、スウェンを見ながらも、答える。

「……はやて」

「ぐすつ、なんや？」

「……もし、俺がこの時点で裁かれる身であるのなら、俺は罰を受ける」

「え!？」

「そ、そんな!」

「全ては、覚悟の上で、お前達にこれを見せた」

そう、全てはこの先の未来を進む子供たちのためでもあったのだから。^{ら。}

「だって、スウェンに罪はないよ!なんでそんな……」

「確かに、強制的に戦わせられただが、この手はもう血まみれだ」

人を殺した。それが直接でない、MS側からにしても、トリガーを引いたのはスウェン自身だ。それは確かに、紛れもない真実だった。

「話は終わりだ。部屋に戻れ」

フォーワードを退出させ、スウエン自身も部屋を出るため扉へ向かう。だがそこで立ち止まった。

「はやて、お前の部隊長として言う俺への処遇は明日聞かせてくれ
そう言っつてスウエンは部屋を出た。

スウエンが退出した部屋。そこに残っているのは隊長陣。

「はやてちゃん、どうするですか？」

ラインが静寂を破った。

「うん……うちは、スウエン君のことを本局に通報はしようない」

「はやて……」

「スウエン君の目、昔のうちと同じや。孤独で、寂しい眼……
自分を責め続けてる。みんなはどうや？」

「スウエンの過去……それは確かに許されませんし、罪も永劫に消えませぬ。ならせめて、主はやてが我々にしてくるようにな、共に罪を背負ってやるべきではないでしょうか？」

シグナムの言葉に、ザフィーラも頷く。

「奴の過去を聞いた以上、そうするのが、奴を本当に救う近道かもしれない」

「そうだな、あいつ……リインフォースに似てた」

「スウエンさんに、本当の幸せを教えてあげたいですね」

「なのはちゃんたちはどうや？」

言うと、なのはも頷いた。

「うん、スウエンさんは今きつと苦しんでる。スウエンさんは私を助けてくれた。だから私も……私も、スウエンさんを助けてあげたい」

「私ももちろん、スウエンを救いたい。一人の孤独、罪を背負うこと、全部私と一緒にだよ。だからこそ、スウエンを変えたい、スウエンの笑顔がみたいから」

こうして隊長陣は話を終え、ロビーを出て部屋に帰ることにした。

隊長陣が去っていくと、影からスウエンが出てきた。実を言えば、隊長陣の小さな決意は、ドア越しでスウエンが聞いていた。

『だそうですね、マスター？』

「……………」

『今更ですが、過去を見せて正解だと私は思います』

「だがそれで、俺の過去が清算されるわけじゃない」

『そんなこと分かっています。罪は消せません。背負って生きていくしかない。でもその背負うべき荷を、誰かと共有するのは、悪いことでしょうか?』

「……………だが」

『少なくとも今の貴方には、自分を支えてくれる人たちがいるでしょう?』

「……………」

スウエンは眼を閉じ、沈黙した。自分の罪、彼女たちは受け入れてくれた。かつてのセレーネのように。その優しさはスウエンにとって毒となるのか、それとも特効薬となるのか……それはスウエン本人ですら分からないだろう。だがスウエンの心には、どこか心地の良いものがあつた。

「俺は星を目指す……………だから今自分を支える星たちを、俺は守ることにしよう」

『オーライ、マイマスター』

こうして長かった一日は終わりを迎えることとなった。

Episode 6 「消えない傷」(後書き)

秋風「久しぶりにこちらでも更新です」

スウエン「他の連載もあるのでほとんどかけないのか」

秋風「だけど頑張ります！」

スウエン「次回、Episode 7 「休日と邂逅」悲しみの闇、
断ち切れ！ガンダム！」

Episode 7 「つかぬ間の休息」(前書き)

久しぶりの更新です、覚えている人は少ないでしょうが、がんばりますw

ではごっご

Episode 7 「つかぬ間の休息」

ティアナとなのはの戦いから数日が過ぎた。スウエンはデバイスルームにいた。

「ノワール、どうだ？」

『はい、問題ありません・・・私、ストライクノワールの換装パツクはしっかりと作成されました。私の中にあつた地球軍のデータは再現されています。アナザートライアルソードストライカーとアナザートライアルランチャーストライカーも可能です』

「スターゲイザーはどうだ？」

『まだしばらくかかりますね。なにせ一からの構成です。それなりに難しいことを覚悟していてください』

「ああ、わかった」

スターゲイザーは星を目指す者・・・スウエンにとっては欠かせない存在だ。

「もう少し時間をかけていい。ちゃんと完成を頼む」

『オーライ、マイマスター』

そんな会話をしていると、フェイトがデバイスルームに入ってきた。

「スウエン、いいかな？」

「フェイトか、どうした？」

「あのね、今日はフォワードは訓練お休みの」

「そうなのか、ならゆっくりできるな」

訓練の協力をしているスウェンはなのはたちと同様の仕事量をデスクワーク以外でこなすので、なかなかハードだ。

「でね……その、もしよかったら私と……その」

「？」

「私と、町にで、出かけない？」

「別に構わないが？」

「ほ、ほんと!？」

フェイトの顔が一気に明るくなった。

「じゃ、じゃあまた後で！」

スキップでフェイトは部屋を後にした。

「なんなんだ……」

『マスターはもう少し、そちら方面も鍛えねばいけませんね』

「何の話だ？」

『いえ、なんでもありません』

マスターの鈍さに、呆れてしまうノワールだった。

そんなころ、フェイトは部屋で顔を赤くしていた。

「こ、これってデート・・・なんだよね」

『そうですね』

相棒に語りかけるフェイト。かなりオロオロしていたりする。実を言えば、あっさり行くと思わなかったからだ。

「ど、どうしよう・・・どうしよう」

自分は生まれてから母のプレシア、その使い魔のリニス。そして自分の使い魔のアルフト、女性しかいない環境で育ち、ハラオウン家の養女となってからも、クロノはあくまで兄という存在であり、好きになる異性の対象ではない。中学でも常にアリサ、すずかなどを含めた5人でずっといたため、男子と交わる機会というのは極端に少なかった。さらに卒業後はすぐに時空管理局に勤務しているため、自分たちは男縁がないとはやてがいつていたのを思い出した。なので今回のデートなるものは、男縁がなかったフェイトにとって初めての経験なのである。

「フェイトちゃん？」

「わひゃあー!？」

いきなりなのはに声をかけられ、驚くフェイト

「ちょ、フェイトちゃんどうしたの？顔真っ赤だよ!？」

「その、実は……………」

今までのことを、フェイトはなのはに話した。

「なるほどね……………ならフェイトちゃんには……………これとこれで、アクセはこれかな？」

と、すぐになのはは服を選び出した。

「え、なのは?」

「頑張つてねフェイトちゃん、私応援するよ」

「え、ちょ、なのは!？」

「だってそうでしょ?」

「いや、それはその……………それはそうんだけど」

いつも凜々しい執務官はどこに行ったのかと、アタフタするフェイトを見てなのはは思う。

(私もユーノ君に会いに行こうかな……………)

「ふえつくしよん！」

「あれ？司所長風邪ですか？」

「そうだね・・・そうかも」

ユ一ノはくしゃみをしていた。

それからしばらくして、スウエンは六課の前に来ていた。待ち合わせ場所は入り口ということになっている。

「お、お待たせ・・・」

そこにいたのは私服となったフェイトだった。普段から六課の服だったフェイトだが、私服を見たスウエンは驚いていた。

「どうしたの？スウエン」

「いや、お前の私服は初めて見た」

「そ、そうかな・・・」

「ああ、とても似合っているぞ」

言われて、フェイトは顔を真っ赤にする。

「あ、ありがとう・・・じゃあ、行こっか」

「ああ、そつだな……」

こうして、フェイトの車に乗り、スウエンはフェイトと一緒にクラナガンへと向かうことになった。

どこかの下水道

そこに一人の少女がいた。2つの箱を引きずり、歩いている。

「マ……マ……」

少女はただひたすら歩き続けた。

「ここがクラナガンか……」

「どつ？スウエン」

「俺の世界では見れない景色だな」

その発展した科学文明を見て、スウエンは驚く。

「さて、どこに行きたい？」

「ああ、少し服を見たい」

私服は渡されたものしかないスウエンだが、ほかにあるのはパイロットスーツとパジャマだけ。勤務以外で着る服がないので、欲しいところだ。

「じゃあいいお店知ってるから、行こう!」

「ああ、そうだな」

フェイトが手を引き、町を歩き出した。

「あ、ごめん・・・!」

「いや、別にいい。この人ごみだと迷うからな」

勢いでやったことだが、フェイトは今さらながら恥ずかしかった。そしてそのままデパートの中へと入っていった。

デパートで買い物を終えて、フェイトたちは昼食をとっていた。

「どうスウェン、欲しいものは見つかった?」

「ああ、なかなか良いものかな」

服は全て宅配で六課に送っている。

「このあとはどうしようかな・・・」

「フェイトはどうなんだ?」

「え?」

「午前は俺のために動いてくれたからな、午後はフェイトが好きな

ところに行けばいい」

スウェンが言うと、フェイトは少し困った顔になった。

「それが私、普段休みを取ることが少ないから、どうしたらいいか……」

ワーカーホリックとはよく言ったものだ。もう仕事中毒の域ではないだろうか。

「とりあえず町を歩けば良い。お前がやりたいことを探すためにな」

「うん、そうだね……」

そんな話をしていると、通信が入った。エリオとキャロから、全体への緊急通信だった。レリックと、レリックを持っていた少女を保護したというものだった。

「スウェン！」

「ああ、行くぞ！」

こうして、スウェンとフェイトは現場へと向かった。

Episode 7 「つかぬ間の休息」(後書き)

スウエン「何か、いうことはあるか？」

秋風「ごめんなさい！」

スウエン「とりあえずチリになれ」

秋風「許して！」

スウエン「しかたない、レクイエムn発射口に入れてやる」

秋風「死亡確定!？」

スウエン「まあいい・・・ちゃんと更新しろ」

秋風「ごめんなさい！」

スウエン「次回、EPISODE 8 『守るべきもの』消えぬ連鎖、
断ち切れ!ガンダム！」

Episode 8 「守るべきもの」(前書き)

今回はちょっと長めです。放置しててすみません

Episode 8 「守るべきもの」

スウエンとフェイトは急いで現場へ急行した。すでにフォワードとなのがいた。

「状況は？」

「レリックをこの子が持ってきてて・・・」

「子供？」

そこに眠っているのは金髪の少女だった。

「・・・・・・」

ボロボロの布を体にまとい、傷だらけ・・・スウエンは静かに自分の考えを告げた。

「この子どもは・・・普通、ではないな」

「え？」

「なんらかの実験施設などから逃げて来た可能性もある・・・まっとうな子供ではないだろう」

そんな言葉に、エリオが悲しい顔をする。

「どうした、エリオ」

「い、いえ！なんでもないです」

すると通信が入る。海上と地下にガジェットの反応があるのだという。

「……スウェン、どう思う？」

「……おそらく、空を飛べるフェイトとなのは……そしてフォワードを分ける作戦だろう。その間にこの子どもを狙う……よくできた手だ」

「じゃあどうすれば？」

「……海上のガジェットをフェイトとなのはで叩く。だがその際へり周囲にサーチャーを撒くのを忘れるな。フォワードは十分注意してレリックの保護へ向かう。敵がどんなであろうと油断はするな……キャロたちくらいの子供であっても、お前たち以上に訓練を積んでいる可能性がある」

かつてスウェンの世界で一機のジンが暴れまわったことがあった。その滅茶苦茶ながら正確な操縦はコーディネーターの子供によって行われたものだった。スウェンの言葉を理解し、フォワードが頷いた。

「……はい！」「」「」

「フェイト、サーチャーは念入りに出せ。へりを狙撃する可能性もある」

「え？」

「へりを落とす、レリックとこの子どもを何らかの手立てで入手しようとする可能性も出てくる。十分に注意するんだ」

「うん、わかった」

こうして各自が動き出し、スウェンはへりの護衛へと付くことになった。

そして、スウェンの読みは見事に当たることとなる。地下のレリックのケースを敵に奪われ、海上のガジェットによってなのは、フェイト、はやてがかく乱され、へりに向かって砲撃が行われた。

「ノワール！」

『オーライ、エールストライカーセット！』

スウェンはノワールストライカーを外してエールパックを装備し、そのビームコートがされたシールドでそれを防いだ。

「こちらスウェン・カル・バヤン……へりの防御に成功、砲撃方向より敵を発見した。これより殲滅する！」

再びノワールパックをに換装すると、バーニアを吹かしてその方向へ向かった。

「は、速い！？」

そこにいたのは巨大な砲台を持った少女と、眼鏡をかけた女だった。

「・・・お前たちか、砲撃を行ったのは」

「やつば・・・」

逃げようとするが、スウエンはそれを許さない。すぐにワイヤーを伸ばし、絡め取るうとする。しかし、少女たちの姿が消える。

「何!?!」

すると、二人は遠くへと逃げていた。

「ディエチちゃん、逃げるわよ!」

「わかってる!クアットロ、もう一度シルバーカーテンを・・・」

「逃がさん!」

バーニアを吹かしてビームライフルシヨ　ティーを撃ち放つ。

「ちよつとお!管理局員のくせにその変なバリアジャケットと兵器は違法じゃないのお!?!」

クアットロと呼ばれた女が文句を言う。

「俺は局員ではない」

バツサリとその言葉を斬り捨て、ビームブレイドを突き刺し、その進行を妨げる。そしてディエチと呼ばれた少女の足に、ワイヤーが絡まる。

「しまった!？」

「はっ!」

「ぐはっ!」

デイエチが壁に叩きつけられる。

「そこでおとなしくしている」

バインドをかけ、クアットロを見る。

「さて、首謀者はどこだ……そしてお前達が何者なのか……答えろ」

凄まじい殺気がクアットロを支配する。デイエチもそれに恐怖し、体を震わせる。

「だ、誰がいう『ガキーン!』ひい!」

足の間にビームブレードが突き刺さり、寄りかかる壁に何発ものビーム粒子が激突した。

「……そうか、そんなに死にたいか」

「ひ、ひいい!しゃ、喋ります!喋りますからあ!だから、だから殺さないでえ!」

もう完ぺきに堕ちたと言うべきか……クアットロはあまりの恐怖

に失禁し、白目をむいて気絶してしまった。

「……気絶したか」

「ひい！」

「……しかたがない、お前に聞くとしよつ」

スウエンはデイエチを見る。ストライクノワールの姿だからか、デイエチはより一層の恐怖を感じていた。

「……仕方がない」

スウエンはため息をついて武装を解除した。

「え……人間？」

どうやら完ぺきに化け物と取り違えられたらしい。

「名前は？」

「デイ、デイエチ……」

普通の質問にデイエチは戸惑いながらも答える。

「お前達は随分珍しい格好をしているな……スカリエッツィの部下はみんなそうなのか？」

「……えと、これはその……戦闘スーツ」

「戦闘スーツ……か……年頃の娘がそんな格好とは……情けない」

「ば、馬鹿にするな！好きで着ているわけじゃない！」

「……そうなのか。まあもう一つ聞くが……お前は人間か？」

「なんで？」

「お前の体から……戦ったときに機械の駆動音が聞こえていた。さらに言えば、デバイスもなしにあんな身体能力……普通の人間でも、強化人間でもあり得ない」

「私は戦闘機人……ナンバーズ」

「ナンバーズ……」

スウェンが考え込んでいると、突然ビルが崩れる。どうやら先ほどの戦闘に耐えられなかったらしい。そして真下にはディエチがいる。

「きゃああああああっ！」

「つく！ノワール！」

『オーライ！セットアップ』

ストライクノワールとなったスウェンはディエチを庇い、瓦礫の中に埋もれた。丁度そこへ、同じ格好をしたショートヘアの女性が降りてくる。

「クアットロ・・・おいしっかりしろ！」

完ぺきに気絶しているクアットロを見て、女性はため息をつく。

「デイエチもいない・・・まさか、管理局の手に？しかたがない、クアットロを連れて帰るしかないな・・・デイエチの搜索は後だ」

こうして女性はクアットロを担いで消えた。そして一方のスウエンたちはその瓦礫の中に閉じ込められていた。

「ぐっ・・・」

「あなた・・・なんで」

「・・・人を助けるのに、理由などいらんだらう」

スウエンの言葉にデイエチが驚く。

「でも、私は戦闘機人で・・・人間じゃない。これくらいの岩なんて、くらっても壊れ「やめろ」え？」

「人間のお前が、壊れるとか言うな」

「だから、私は戦闘・・・違うだらう」え？」

スウエンは静かに言う。

「どんな生まれ方であれ、お前は人間のはずだ・・・お前達の様な若い子供たちが、戦いをする理由もない。戦闘機械ではないだらう。機人と言うなら、人にもなれるだらう」

「あ……」

「人として生きる……そして、人としての幸せを掴みとれ」

このあと、なのはたちがノワールの反応を確認してスウェンとデイエチを保護した。結果は以下のとおりである。

廃棄都市での事件

保護

身元不明の人造魔導士

一名

ナンバーズと名乗る戦闘機人 一名

負傷者

機動六課民間協力者 スウェン・カル・バヤン 軽傷

保護ロストログア

レリック 二つ（封印済み）

備考

レリックのうちの一つはケースを凶としたためケースは紛失した。

以上

次にスウェンが目を覚めたのは病院だった。

「……」

起き上がり、周りを見ると、未だに簡易拘束のまま眠るデイイチと、ノワールを見つけた。

「ノワール、ここはどこだ」

『ここは聖王病院だそうです』

「保護された子供は？」

『ここにいるらしいです』

「そうか・・・」

作られた子供・・・かつての自分の世界にいたエクステンデット・・・それと同じなのかと少し心配になる。不安定な子供たち・・・戦うためだけに作られた。そんな子供。

「・・・外の空気を吸うとしよう」

スウエンは考えすぎて気分が悪くなったので、外へ出ることにした。ここちのいい風が吹き、いい天気だった。

「・・・いい風だ」

「あ・・・」

すると、昨日の少女を見つけた。スリッパの所を見ると、どうやら病室を抜け出したらしい。

「どうした？」

「あ……」

『（マスター、まずは警戒を解かせるべきかと）』

「（そういうのは苦手なんだがな……）」

そんなことを思いながら、少女に視線を合わせた。

「こんなところでどうした？名前は言えるか？」

「ヴィヴィオ……ヴィヴィオのママ、いないの」

どうやら親を探そうとしたらしい。だが、人造魔導士であるこの子どもに、親はいないだろう。スウェンはそれを言わず、抱き上げた。

「そうか……一人で寂しかっただろう」

「寂しくないよ……お友達がいるから」

そう言っつてウサギの人形を見せる。スウェンは思わず笑みをこぼした。

「そうか……それは安心だな。ではヴィヴィオの母が戻るまで俺が相手をしよう」

「お兄さん、お名前は？」

「そうだったな……私はスウェン・カル・バヤン……スウェンと呼んでくれ」

スウエンがそういうと、表情が明るくなった。

「うん！スウエンお兄ちゃん！」

すると、一筋の閃光が舞い降りる。武装した騎士だ。

「その貴方！止まりなさい！」

「ひう！」

ヴィヴィオが驚いてスウエンにしがみつく。

「……何者だ？」

「聖王協会シスターのシャツハ・ヌエラです！その子を渡しなさい！」

「……機動六課民間協力者のスウエン・カル・バヤンだ……この子は無害だ。何故渡す必要がある！」

「その子供は人造魔導士！どんな危険があるか……」

その言葉に、スウエンがキレた。

「ふざけるな……人造魔導士だからなんだ……普通の子供に武器を構える貴様のほうがよっぽど危険だ……ヴィヴィオ、隠れている。ノワール！」

『オーライ、セットアップ』

ストライクノワールになり、ビームブレイドを構えた。

「なっ!?!」

「貴様のような輩は許せん……」

「いいでしょう、カズくでも!」

シャツハが駆けだし、トンファーを振るう。スウエンはそれを受け止め、斬りかえず。

「ぐっ!」

「終わりだ!」

ビームブレイドを振り下ろしたその瞬間、別の何かに止められる。そこにいたのはシグナムだった。

「やめろスウエン!」

「シグナム!?!」

「シスターも武器を収めていたみたい。一部始終を聞いていた。こうしてシグナムが仲裁に入り、なのはとフェイトたちもやってきた。」

「スウエン!もう動いて平気なの!?!」

「ああ、もう大丈夫だ・・・心配かけたな」

「ううん・・・あれ？」

みると、ヴィヴィオがぴつたりとスウエンの足にしがみついていた。

「こんにちはー」

フェイトが笑顔を見せると、ヴィヴィオは不思議そうな顔でフェイトを見ていた。

「（フェイトちゃん・・・）」

「（大丈夫、私子供の面倒見るの得意だから）」

「怖かったねーお名前言えるかな？」

ウサギを使い、巧みに話すフェイトを見て、スウエンは少しほほえましかった。どんなに優秀な執務官のフェイトでも、しっかりと女性としての面を持ち合わせていた。こうしてヴィヴィオはスウエンとフェイトに懐き、機動六課へと戻ることになった。

Episode 8 「守るべきもの」(後書き)

今回はお休みです。放置してたのにすいません

スウェン「次回、Episode 9『戦いと平和、想いを空に』悲しき過去の連鎖・・・断ち切れ、ガンダム！」

Episode 「戦争と平和、想いの空へ」 (前書き)

今回はタイトルを変えました。かなり長いですが、どうかお付き合いを

Episode 9 「戦争と平和、想いの空へ」

病院から機動六課へ帰ると、フォワードメンバーがスウェンを迎えた。

「スウェンさん！」

「スウェンさん、もう大丈夫なんですか!？」

「ああ、すまない・・・心配をかけたな」

「よかったあ・・・」

「あれ？スウェンさんその子は・・・？」

エリオが指差す先には、保護された少女、ヴィヴィオががちりとスウェンの足を掴んでいた。どうやら人見知りがあるらしく、怯えてひっついてる。

「先ほど保護した子だ」

「・・・・・・ヴィヴィオ、です」

「色々あって、スウェンさんに懐いちゃったんだよね」

「へー」

なのはの言葉を聞きながら、スウェンはヴィヴィオを見ていた。

「・・・・・・・・・・」

「スウエン？どうしたの？」

「いや・・・なんでもない」

すると、はやてからフェイトに通信が入った。

「どうしたの？はやて」

「あ、フェイトちゃん？なのはちゃんにスウエン君もおるんやな・・・
ちよう、ついて来てくれへんか？聖王教会まで」

「うん、わかった」

フェイトが頷き、スウエンとなのはにもそれを知らせる。

「わかった・・・すまんが俺は出かける。しばらくフォワードが面倒を頼む」

「え・・・」

それを聞いたヴィヴィオが目には涙をためる。まるで世界が終わるのではないかと言つほどの表情だ。

「後は頼むぞ」

「あ、は「やだああああ！いつちややだああああ！」「うわっ！？」

大泣きである。さすがにこれにはスバルだけでなくのはたちも驚

いた。フェイトがなんとかなだめるが、スウエンから離れようとしてない。フェイトの説得によって何とか離れたが、そんなスウエンの顔には、どこか悲しい表情があった。

「スウエン？」

「なんだ」

「どうしたの？」

車の中で先ほどのことを聞こうとするが、スウエンは答えなかった。そんなことの後、聖王教会へと到着し、部屋に入った。そこには金髪の女性と、黒髪の男が座っていた。

「クロノ提督、お久しぶりです」

「こんにちは、騎士カリム」

「ふふふ、別にかたくならず、いつも通りでいいですよ」

カリムの言葉のあと、フェイトが再びクロノのほうに向く。

「お兄ちゃん、元気だった？」

「お、おい！？お互いもういい年だぞ。その呼び方はよせ」

「兄妹の間に歳は関係ないよ」

「そして……初めましてですね、聖王教会騎士、カリム・グラシ

アです」

「時空管理局提督クロノ・ハラオウン・・・フェイトの義兄でもある」

「・・・スウェン・カル・バヤンだ」

そう言つて、スウェンは答える。そしてカリムの口から出される機動六課設立の系譜と目的・・・そしてカリムの予言

『古き結晶と無限の欲望が集い交わるとき、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け落ちる。』

これが示すのは地上本部の崩壊、そして時空管理局の崩壊を意味している。なのはとフェイトは驚くが、カリムはさらに言葉を続ける。

『漆黒の流星は死せる王の元へ、その身に星を目指す希望を携え王に挑む。世界は漆黒の流星と無限の欲望が見せる激闘の世界。無限の欲望は終焉を迎える』

「・・・」

「この黒い流星って・・・」

「スウェンの、こと？」

黒い流星・・・すなわちストライクノワールのことを指している。

そして、星を目指す希望とは、現在開発中のスターゲイザーを指すものだと推測できる。

「お二人はもちろんこと・・・スウエンさん、貴方もこの予言阻止のために協力していただけませんか？」

「非才な身なれど、全力にて、協力させていただきます」

「私も同じです」

なのはとフェイトは迷うことなく頷くが、スウエンは黙ったままだ。

「スウエンさん？」

はやてがおそるおそる聞く。

「なんだ？」

「スウエンさんは、どないやろうか？」

「さあな」

「さあなって・・・」

フェイトは感じていた、少なからず彼が秘める『怒り』を

「君にも力がある・・・是非協力してくれないか」

「・・・『機動六課に協力はする』とは言ったが、俺は管理局に尽くすつもりはない」

「なんだと？」

クロノが怪訝な表情でスウエンを見る。

「そもそも、そんなことのために、何故協力しなければならない？」

「そんなことだと!？」

クロノが思わず立ち上がった。彼も提督だ。管理局を馬鹿にされるという点があるのだろう。カリムになだめられ、椅子に座る。

「俺はこの世界の人間ではない・・・そして所属もしていない組織に忠を尽くす必要などあるまい」

「だが君には力がある!何故それを世界の平和、そして正義のために使わないんだ!？」

「それは私も思います。何故、あなたは協力を拒むのですか？」

「・・・世界のため?子供を戦場に駆り出す連中に平和を語る資格があるのか？」

「!？」

「支援者なら知っているはずだ。20代にも満たない子供たちが・・・果ては10歳の子供が機動六課で戦場に出ていることを」

「そ、それは・・・」

クロノが言葉を濁す。確かに、スバル、ティアナ、キャロ、エリオは子供だ。さらに言えば、キャロとエリオはまだまだ子供なのだ。

「世界の平和？世界を守るためなら未来ある子供たちの命はどうでもいい。自分たちの命はどうでもいい・・・そう思っているんだろう、貴様らは」

「そ、そんなことはありません！私たちは・・・」

「なら何故機動六課だけに頼んだ」

「え？」

「貴様らが本当に予言を心配するのなら、もっと救援を求めるはずだ」

「それは人員不足で・・・」

「人員不足？管理局は数多の世界を守る組織なのだろう？地上本部とやらが信用していなくても、実証するなりなんなりして手立てを出せばいい。なのに一個部隊に世界の命運を任せるなど馬鹿げている。そんな戦いであいつらが・・・それにここにいる3人が命を落とす可能性が低いわけではあるまい。貴様らは安全な場所から見ているからそう言えるだけだ」

スウェンの静かな怒りに押され、カリムは引き気味になった。だが、クロノは引かない。

「だがそれは数多の世界を把握するのが我々の使命だからだ！」

「・・・それは誰が決めたことだ？この世界で『偶然』にもできた次元航空の技術を使って神を気取っているだけだろう」

「何っ!?!」

「なら貴様が望む平和とはなんだ?人々が争わない世界か?それとも世界が統一された世界か?どちらにしる、人は人である限り、争い、利益を生むために他者を犠牲にし続けるだろう。敵を倒してでも、利益を生もうともする。では敵とはなんだ?絶対的な敵とは?それはいつの時代、どの世界でも『同じ人間』だ。管理局が正義?笑わせるな。戦いにおいて正義などない。戦いとは・・・そして戦争とは、悪と極悪の戦いとなる」

「では貴方にとって、平和とは・・・なんなのでしょうか?」

カリムの言葉にしばらく黙っていたスウェンだが、一つの結論を提示した。

「平和など・・・戦いの後に残る事実だ。もう俺は帰る」

「あ、ちよつとスウェン!待って!」

出ていくスウェンを追いかけ、フェイトが退出する。

「え、えーと、私も行きます!」

なのはが退出するが・・・

ガシッ!

はやてがそれを止める。

「（この気まずい空気のうちを残さんといて！）」

「（あつう〜）」

「なあ、はやて?」

「な、なんや?」

「彼はどうしてここまで管理局を嫌っている?」

「……………スウエンは、自分の世界では軍人やったんよ」

「軍人……………」

「だからこそ、管理局が子供を戦いに参加させるのが許せへんのやろ…………それを言えば、うちらも9歳、10歳から管理局いるんやけどなあ……………」

そんなことを言っていると、少し沈んだ表情ではやてを見た。

「ねえ、はやて?」

「今度はなんや?」

「あの方は確かに黒い流星…………それはいいんだけど」

「…………?」

「あの人の瞳に宿る悲しみは、一体何かわかる?」

この時はやてとなのはがぎよっとする。言えるわけがない。彼自身が、戦争の道具であったこと、そして戦争を嫌う理由を

「さ、なあ？」

「そう・・・」

「じゃあうちらも帰るぞ」

「そだね」

こうしてはやてとなのはは帰ることにした。

隊舎に帰ると、ヴィヴィオはスヤスヤと眠りについていた。

「あ、スウエンさん」

「エリオ、キャロ・・・この子の相手をしてくれたらしいな」

「はい、ヴィヴィオ、いい子でしたよ」

「そうか」

スウエンはそれだけ言って立ち去ろうとする。しかし、後ろにいたフェイトに止められる。

「スウエン？」

「どうした」

「その子、面倒見て上げないの？」

その言葉に、少しだけ反応を示す。

「……………俺に、その資格はない」

「どうして？」

「…………俺の手は、もう血まみれだ」

自分の手を見ながらスウエンはそう告げる。トリガーを引き、この手で何人も人間を殺してきた。そしてMSを駆り、その手に取った操縦機のボタンを押しては敵のMSだけではなく、コーディネーターというだけで非武装、非戦闘の民間人を、難民を、この手にかけて来た。

「でも、それはスウエンの責任じゃ……………」

「確かに命令したのは上の人間だ……………だが、実行したのは俺自身……………俺達、ファントムペインだ」

「……………」

フェイトはそれに黙る。管理局は非殺傷設定というものを定めている。今まで犯罪者を傷つけることがあっても、自分は殺すことなど決してなかった。だからこそ、フェイトはスウエンの心がわからないのだ。

「でも……………それでも私は……………」

「ん……」

そこで、ヴィヴィオが目を覚ました。

「スウエンお兄ちゃん？」

「………あぁ」

「スウエンお兄ちゃん！」

眠気を飛ばし、嬉しそうにヴィヴィオはスウエンに飛びついた。スウエンはそれを受け止める。

「ヴィヴィオ……」

「スウエンお兄ちゃん、お帰りなさい！」

「………ただいま」

静かに、スウエンは答える。嬉しそうにヴィヴィオはすり寄る。離そうとするが、離してはくれない。離

「……ヴィヴィオ、離れてくれないか」

「や……」

「……俺の様な汚れた人間のそばにいては、ヴィヴィオのためにならない」

「うー？」

ヴィヴィオは意味がわからず、首を傾げる。すると、フェイトが顔を伏せてスウエンのそばによる。

「スウエン」

「なんだ？」

パアッン！

思い切り、スウエンの頬が叩かれた。ヴィヴィオはそれを見て驚愕した。それだけではない。エリオとキャロも、それに驚いていた。

「馬鹿っ！」

「フェイト？」

「馬鹿っ！馬鹿っ！馬鹿っ！馬鹿っ！」

何度もスウエンを叩く。フェイトは涙を流しながらも、スウエンを叩きつづける。

「どうして！どうしてそんなことを言うの！？自分が汚れてる！？そんなこと言わないで！」

「だが・・・俺は・・・」

「なんで一人で抱えるの！？なんで一人で道を歩こうとするの！？そんなに、私が！私達が信用できないの！？さっきだってそう！平

和だって、私達が作っていけばいい！目指せばいいんだから！」

「フェイト……」

涙を流し、抱きつくフェイトを、スウエンは優しく受け止める。その涙はスウエンの制服にも着き、濡れていた。

「私は……スウエンの心がわからない……でも、理解したい……理解していききたいよ」

「フェイト……」

「スウエンさん……」

「エリオ？」

「僕も、フェイトさんと同じです。一緒に戦ったからわかります。スウエンさんは……すごくいい人で……温かくて……」

「エリオ……」

「私もエリオ君たちと同じです……フェイトさんから聞きました。私達が戦いの場へ……戦場へ行くことを、ずっと心配してくれていたって……そんなスウエンさんが、汚れてるわけないです！」

二人も少し涙で目が潤んでいた。10歳には少々荷が重かったかもしれない。エリオは『僕たちはスウエンさんの味方ですから』そう言っただけ泣くキャラを連れて外へ出た。そしてそこにいるのは現状がわからないヴィヴィオと、フェイトの二人だけだ。

「・・・フェイト」

「何？」

落ちついたフェイトが、静かにスウエンの声に答える。

「何故お前は・・・そこまで俺に？」

スウエンの疑問はそこだった。ナチュラルの自分は、宇宙ステーションでもそこまで人と接することがあったわけではない。むしろ嫌われ者でもあったかもしれない。前宇宙ステーションを襲った地球連邦の兵士・・・ファントムペインの男。ナチュラルとコーディネーターのへだ溜まりだって、消えたわけではない。ソルやセレーネが仲介にいたからこそ、スウエンはそこでやっていけたのだ。

「・・・まだ、わからないの？」

言うと、フェイトは目を閉じてスウエンと唇を重ねた。

「ん・・・!？」

「ん・・・」

唇を離すと、フェイトはまっすぐな瞳でスウエンを見た。そしてフェイトは、その思いをぶつけた。

「私は・・・あなたが、大好きです」

「フェイト・・・」

「だから私は、スウエンのそばにいて、貴方を理解したい」

誰もいない、静まったロビーで、ヴィヴィオがただそれを見る。それ以外は何もない。そして……

「フェイト……」

「……何？」

「ありがとう」

今度はスウエンが強くフェイトを抱きしめた。それが唯一、絶対の答えだ。

「ス、ウエン……」

「俺は……確かに間違っていた……だが、この手が汚れている……そんな俺を、お前は受け入れてくれるのか？」

「……馬鹿、私を守ってくれる……そう言ってくれただけで、十分だよ」

嬉しそうに、フェイトは笑っていた。しばらくして、まったく状況の掴めないヴィヴィオを、スウエンが抱き上げた。

「ヴィヴィオ」

「…?」

「お前のおかげ・・・かもしれん。ありがとう」

「うん！」

ありがとうという礼を言われ、ヴィヴィオが嬉しそうに喜んだ。

「これからはお前も守る・・・安心して傍にいる」

「うん・・・スウェンお兄ちゃん！」

そんな光景にフェイトが微笑む。

「ふふつ、なんだかスウェン、お父さんみたいだね」

「む・・・俺が父親か？」

少し困ったようになるスウェンだが、ヴィヴィオがそれを聞き、スウェンを見つめる

「スウェンパパ？」

「ヴィヴィオ？」

「駄目？」

「別にかまわんが・・・それでいいのか？」

「うんっ！」

嬉しそうにヴィヴィオは頷き、ひつつく。

「じゃあ、私はママかな？」

顔を紅くしながらも、フェイトが言う。そして

「フェイトママ？」

「なに？ヴィヴィオ」

「えへへ」

こうして、闇の底にいた漆黒の流星は優しき雷光に救われたのだ。小さな幸せと共に

Episode 「戦争と平和、想いの空へ」 (後書き)

秋風「今回、題材は変えました。スウエンのことをもっと注目させ
たかったので」

スウエン「それにしても、急な展開ではないか？」

秋風「そうか？」

スウエン「別にお前がいいならいいがな」

秋風「ま、気にすんな！」

スウエン「次回、Episode 10『平和な日々』 平和なる世界、
駆け抜ける、ガンダム！」

Episode 10 「平和な日々」(前書き)

今回は連続投稿です

テスト終わったんで頑張ります

Episode 10 「平和な日々」

ヴィヴィオが機動六課に来てから次の日。前日とは打って変わった平和な暮らしをしていた。現在スウェンはヴィヴィオと共に朝食を取っている。

「・・・ヴィヴィオ」

「う？」

「好き嫌いは駄目だ」

その先にあるのはピーマンだ。子供なのか、それとも元からのオリジナルがそうなのかは知らないが、それを見て苦い顔をする。

「ピーマンきらい」

ヴィヴィオは診断の結果、人造魔導士とされた。それを聞きスウェンは何も言わなかったが、フェイトとエリオはスウェンに話した。自分の出生、自分の今までのこと。それを聞き、耐えきれなくなつたキャロも離れた。自分の力の大きさを。しかしスウェンはただ三人を抱きしめ受け入れた。フェイトと同じように、スウェンはそれを受け入れたのだ。そんなわけで、現在彼らの親密度は一気に上がつていた。

「おはようございます！」

「おはようございます、スウェンさん！」

「おはようスウェン」

笑顔の三人はスウェンの席に座る。

「ああ、おはよう」

微笑み、それを受け入れるスウェン。そして蚊帳の外のなのはとはやて

「ねえなのはちゃん？スウェン君の表情、なんか変わってへんか？」

「・・・うん、なんか柔らかいというか」

そんな二人の会話をよそに、団欒は続く。

「あ、ヴィヴィオ？ピーマン残してる」

「ぶー！嫌いだもん！」

「だが大きくなれんぞ・・・ちゃんと食べなければ」

「・・・はい、スウェンパパ」

この一言に、食堂が騒然となった。

「パ、パパって・・・スウェン君どういうことや!」

「いや、それはだな・・・」

「えーと・・・」

スウェンとフェイトが困ったようになる。だが、それだけはない。ヴィヴィオがさらなる爆弾を投下した。

「フェイトママ、どうしたの？」

不思議そうに聞くヴィヴィオだが、これによって食堂が爆発した。

『マ、ママー!?!』

なのははやてが驚きの声を上げるが、それだけではない。周りにいた男性職員もそうだった。ある職員は声を上げて食堂を走りだし、ある職員は頭を机に打ち付けている。

「少し、成り行きでそうなったわけで……」

「ほんなら、なんでそんな親密度が高いんや？」

「えと、それは……」

「フェイトちゃん？ちよっとお話しよか？」

はやてが手を奇妙な動きをさせてフェイトの制服の襟を掴む。

「は、はやて!?!離して!?!なのは!助けて!」

「フェイトちゃん、ちよっと私も気になるかなあ……」

「なのは!?!?」

こうしてフェイトはなのはとはやてにバインドをかけられ、連行されていった。

「フェイトママ・・・」

「・・・フェイトさん、大丈夫でしょうか？」

「・・・さあ、な」

メディカルルーム

「は、はやて！？離して！」

現在メディカルルームで縛られたフェイトはかなり大人向けな、なんというか、お子様には言えないような形でバインドされている。

「さあフェイトちゃん、日ごろの成長の確認と、お話にしゃれこもつか〜」

「ちょ、待って！やめて！喋るから！」

「さあて、行こうか〜？」

はやてが手をわきわきとさせる。それを見て若干引き気味のなのとは、それに怯えるフェイト。そして

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！……！」

フェイトの絶叫が、機動六課の隊舎に響きわたった。

しばらくして、ボロボロになったフェイトと、つやつやの肌になったはやてがいた。まあ全部吐かされたわけで、それを茶化すはやてまあそんなわけで、スウェンとフェイトの関係は機動六課全体に知れ渡ることとなった。現在スウェンはお昼寝中のヴィヴィオを横に、静かに本を朗読する。学習能力が高いことと、ノワールの高い機械能力から本を訳すのなど容易い。現在読んでいるのはミッドチルダの星についてだ。銀河系と違って他の星が近いので星の呼び方や彗星はあるが、星座というのはないらしい。

「フム・・・」

『マスター、どうしました？』

「なに、この世界に星座はないらしいので・・・ちょっと寂しい
と思うてな」

『星座ですか・・・確かに、このミッドにはありませんが、銀河系
のある管理外世界にはありますよ』

「確かに、この前見た本にはあつたな」

呼び方も変わらない地球の本。違うのはMSがないことと、プラン
トがないことだ。

コン、コンッ

「誰だ？」

ドアをたたく音に気が付き、声で答える。するとエリオとキヤロが入ってきた。

「お、おじゃまします・・・」

「どうした、二人とも・・・仕事は終わったか？」

「はい・・・その、なんとか」

「今日は少なかったので」

と、少し緊張気味の二人。

「どうした？」

「い、いえ・・・」

「まあせっかく来たんだ。茶くらい出そう。コーヒーに紅茶、ココア・・・それにグリーンティー・・・それともジュースか？」

「グリーンティーってなんですか？」

聞きなれない言葉に、エリオが首を傾げる。

「日本で言う緑茶だそうだ。東アジアに訪れる機会はなかったが、そういうのは少し知っていてな。この前フェイトに教えられて絶賛だった」

と、少し嬉しそうに話すスウェン。スウェンの部屋は少し特別だ。

台所や風呂がある。というのも、スウエンの部屋はこれしかなく、空き部屋がVIP待遇用の部屋だからでもある。

「じゃあ、僕その緑茶をもらいます」

「わ、私も」

「そうか、では入れるぞ」

しばらくしてお茶を入れ、二人の前に置いた。

「本来なら緑茶とは日本の茶・・・ティーカップですまないな」

「いえ・・・」

「それで、二人揃ってどうした」

スウエンはお茶を飲ませて安心させたところで、本題に入った。

「えと・・・その」

「スウエンさんに、お願いがあつたんです」

少し顔を紅潮させながらも、キャラが口を開く。

「お願い？」

「えと・・・スウエンさん！」

「私達に！」

「お父さんと呼ばせてください!」

「……………は?」

思わず長い沈黙と間の抜けた声が響いた。

「えと、実はヴィヴィオを見てうらやましくなって……」

「それで、もし気を悪くしないなら呼ばせてもらいたいなって……」

「スウエンは思い出す。この子たちに本当の親はいない。二人とも捨てられているのだ。だからこそフェイトが二人の母となっている。ならば父親を求めるのは当然だ。」

「……わかった」

「え?」

「好きに呼ぶといい。父親……として俺が合うかはわからんが」

「いいんですか!？」

「ああ」

その答えに、エリオをキャロの顔が明るくなった。

「じゃ、じゃあ……父さん……」

「えつと・・・お父さん」

「なんだ？エリオ、キャラ」

この言葉に、嬉しくなる二人だった。

そんな騒動の後、ヴィヴィオが目を覚まして外で遊びたいと言いだしたので、エリオとキャラを連れ、ボールを手に外へ出た。機動六課の庭はとにかく広い。スウェンはボールを足でけり、ヴィヴィオにパスをする。すると今度はエリオがそれを受けてキャラにパスをする。そしてキャラが再びスウェンに返す。今まで遊ぶことを知らない二人には、丁度いいものだった。

「えい！きゃ！？」

途中、蹴るのを謝り、キャラがこける。

「大丈夫か、キャラ」

「あ、はい・・・いたっ！」

どうやら足を捻挫したようだ。

「仕方がない、医務室へ行こう」

キャラをおんぶしてする。すると、キャラの顔が赤く染まる。

「どづした？」

「なんでも、ないです……」

「どうやらこういう経験がないためか、ちょっと嬉しいらしい。」

「お姉ちゃん大丈夫？」

「ヴィヴィオが心配そうに見つめる。」

「うん、ありがとうヴィヴィオ。大丈夫だよ」

笑顔で返すキャロ。ボールを持ちながらエリオも心配そうにキャロを見ていた。医務室で手当てを受けた後、夕食を食べて部屋に戻った。すると、フェイトが部屋にいた。

「フェイト？」

「スウェン」

「はやてにさんざん弄られたらしく、涙ながらにスウェンに抱きついた。」

「……まあ、はやてのいたずらだ……気にするな」

「……うん」

「あ！フェイトママ！一緒に寝よ！」

「ええ！？いい一緒って……」

突然の言葉に驚くフェイト

「パパと、ママと、お兄ちゃんとお姉ちゃん！」

「お兄ちゃんとお姉ちゃん？」

「ああ、実はな……」

スウエンは午後のことを話した。

「そうだったんだ……エリオとキャロが」

「ああ、二人もなんだかんだ言ってもやはり子供だ」

「そだね……ありがとう、スウエン」

フェイトが言うと、スウエンが微笑む。

「何、気にするな」

「じゃあ、二人を呼ばなきゃ」

こうして二人を呼び、ベッドに寝る。エリオはフェイトの隣で、キャロはスウエンの隣になる。当然ながら、少し恥ずかしい二人である。そしてヴィヴィオはそのエリオとキャロの間……つまりど真ん中で満足そうに眠っていた。しだいにエリオとキャロも眠りにつき、起きているのはスウエンとフェイトだ。

「スウエン」

「どうした、フェイト」

「こんな日々が、ずっと続くといいね」

「・・・ああ、そうだな」

こうして、今日も一日が過ぎる。次の日、またしてもフェイトが朝スウェンの部屋から出てくるのをはやてに見つかり、根掘り葉掘り聞かれたのは言うまでもない。

Episode 10 「平和な日々」(後書き)

久しぶりの連続投稿です。ではおやすみ！

スウェン「次回、Episode 11『お友達と外出』平和な時、
駆け抜ける、ガンダム」

Episode 1 「休日と外出と」(前書き)

お久の更新です。お待たせしました

Episode 11 「休日と外出と」

スウエンがヴィヴィオ達の父となって早数日。はやてがこんなことを言いだした。

『たまには休暇を取ってきたらどうや？』

ここに来てから一度しか休んでいないスウエンとフェイト。はやての言葉にヴィヴィオが大喜びでお出かけをするとはしゃぎ、エリオとキャラもそれに賛同してクラナガンへ行くこととなった。私服に着替えたスウエンはフェイトの車に乗る。後ろには右からエリオ、ヴィヴィオ、キャラの順番だ。

「それで、今日はどこに行くんだ？」

「うん、新しくできたテーマパークがあるから、そこに行こうと思っ
つて」

「テーマパーク・・・」

幼少から戦闘訓練を受けて来た『普通』ではない幼少期を送ったスウエンにとっても未知の場所である。エリオやキャラも同じようだ。

「そつえばスウエン、スウエンの世界にはないの？」

「・・・さあな、そついう娯楽とは無縁だった。羽を伸ばす時は星
を見ることくらいしかしなかったからな」

「じゃあ、今度一緒に地球に行こうか」

実を言えば、派遣任務の時スウェンはそれを断り、機動六課の隊舎にいた。それというのも、支給された生活用品の整理などが原因だった。

「・・・そうだな。ノワールには地球の星は俺の世界と変わらないと聞いた」

「じゃあ、僕も天体観測をやってみたいです」

「私もです！」

「ヴィヴィオもやるー！」

三人が嬉しそうに言うと、スウェンは微笑む。

「そうだな・・・今度地球に行ったときにやるとしよう」

そんな話をしながら、車は走っていった。

テーマパークにつくと、ヴィヴィオ、エリオ、キャロの3人は眼をキラキラさせていた。開園してから少し経っているから人も多いのだが、そんなことはお構いなしのようだ。

「パパ！あれ乗る！」

「あ、あれ！？」

「フェイトさんも行きましょう」

そう刺すのは絶叫マシン。お決まりのジェットコースターだ。スウエンは頷き連れて行くが、フェイトは少し引き気味に行くのだった。そしてジェットコースターに乗る。

「・・・・・・・・」

特に反応がないスウエン

「高い〜!」

テンションが高いヴィヴィオ

「ワクワク」

期待に胸を躍らせるエリオとキャロ

「あっ、あっっっ・・・」

さっきからスウエンの服を掴んで話さないフェイト。そして・・・

ゴオオオオオオッ!

「・・・・・・・・」

「わっ!」

「きゃあ〜!」

反応はそれぞれだった。ジェットコースターを降りてフラフラのフェイトを支えながらスウエンが降りる。

「フェイト、大丈夫か？」

「なんとか」

実を言えばこのジェットコースターは地球の技術を多く取り込んだため、普通の人でも悲鳴を上げる絶叫マシンなのだ。ヴィヴィオ、エリオ、キャラがただたんに楽しいだけであり、フェイトが一般人と同じ反応なだけだったりする。スウエンはこれに似た乗り物の訓練でMSの操縦に慣れていったため、特に問題なく乗っていた。というか、恐らくこんなマシンよりもMSに乗って戦った方が怖いだろう。

「次はあれ！」

「今度はこっち！」

次々と絶叫マシンにのるスウエンたち。午前が終わったところで、フェイトがフラフラになってしまったので、昼食を兼ねてレストランに入ることにした。

「フェイト、水だ」

「ありがとう・・・」

そんなフェイトに構わず、3人はメニューに胸を膨らませる。というのも、機動六課のメニューとはまた違っているためだ。

「ヴィヴィオ、お子様ランチ！」

「僕、このサーロインステーキセットで！」

「私はオムライスで！」

「スウエンはどうする？」

「・・・そうだな、カツレツのセットをもらおう」

「じゃあ私はこのグラタンにしようかな」

と、それぞれが料理を決めて待つ。

「そういえばお父さん、お父さんって普段どんなトレーニングをしていたんですか？」

「それはどれだ？地球でか？宇宙ステーションか？こっちでか？」

「こっちです」

と、エリオが聞く。確かにスウエンは人にトレーニングを見せることはない。

「そうだな・・・地球ではMSに乗っていたからある程度筋力トレーニングをしたが、こちらに来てからは自分自身で武器を取り戦うからその武器になれるということをしている。ほとんどはお前たちと同じようになるのはからもらったメニューを組んでやっている」

「へえ〜」

といっても、実際スウエンのトレーニングは並大抵のものではない。

フォワードの訓練の5倍ほどの量をこなしている。もともと身体能力が高いスウェンは白兵戦なども長けていた。しかしそれはあくまで『銃』を持つている状態での話だ。ビームブレードやビームライフルなどのガンダムの武装を扱ったことがあるわけではない。なので最初に始めたのはその武器の扱いに慣れること。毎日30往復、6分間の射撃トレーニングを行い、その武器になれる。さらに慣れてきたら実戦訓練。ガジェットを倒す訓練をこなし、魔力の配分などを考える。これらは総てなのはのトレーニング方法でもある。

「たまに私とも模擬戦するよね」

「ああ、フェイトの戦闘力も申し分ないからな」

フェイトは射撃と近接戦闘の両方を行えるエキスパートでもある。ソードストライカーの様な大刀の使い方も、同じようにジェットガンバーを扱ったり、ガジェットの対策方法を教えてもらうことが多いある。

「今度僕も一緒にトレーニングに付き合ってもいいですか!？」

「ああ、別に構わん」

「あ、じゃあ私も!」

と、嬉しそうな二人。すると、料理が運ばれてくる。

「お待たせしました」

料理が並び、ヴィヴィオが喜ぶ。

「わー」

眼をキラキラさせるヴィヴィオ。エリオとキャロも同じことだ。食事を始めていると、フェイトがあることに気がつく

「ヴィヴィオ？またピーマン残してる」

「あうう・・・」

そう、ヴィヴィオが丁寧にピーマンだけを避けているのだ。

「・・・キャロ、付け合わせのニンジンに手が伸びていないが？」

「はうっ！」

そしてキャロも人参を食べていない。エリオは特に好き嫌いが無いのか、パクパクと料理を食べていた。

「二人とも、残したら駄目だよ」

「はいはい」

こんな感じで、昼食を終えた5人だった。

午後は絶叫系は乗らないということになった。というよりも、全部乗ってしまったというのが正しい。

「パパ〜！」

メリーゴーランドの所で、楽しそうにスウェンを呼ぶヴィヴィオ。

スウエンも微笑み、手を振る。エリオとキャロも手を振ってはしやぐ。

「ふふ、楽しそうだね」

「そうだな・・・今回連れて来て正解だったな」

普段は子供がやるようなものではないデスクワークをするエリオやキャロにとっては、これが正しい二人の姿なのだ。

「フェイト、相談がある」

「な、何？」

「エリオとキャロについてなんだが・・・」

「二人がどうかした？」

「機動六課が解散したら、二人を普通の学校に通わせてやらないか？」

スウエンは数日間考えていた。父と呼ばれる以上、二人の幸せも願っていたい。

「・・・そうだね、それが二人にとっては幸せだし、普通なのかもしれないね」

「ヴィヴィオも、普通の学校に通わせてやりたいものだ」

「じゃあ、みんなですつと一緒だね」

「・・・・・・・・・・そうだな」

腕を絡めるフェイトに、スウェンは優しくそう答えた。すると、3人が乗り終わって戻ってくる。

「パパ！早く行こう！」

「ああ、そうだな」

「フェイトさんも早く！」

「はいはい」

こうして、午後も多くのアトラクションを回った5人だった。

夕方になり、テーマパークを後にした一行は、クラナガンで買い物をすることにした。今回仕事を代わりに引き受けてくれたのはやはり、スターズなどにお土産を買って行くことにしたのだ。

「このケーキはどうか？」

「いいんじゃないか？女性は甘いものが好きだろう」

「パパ！ヴィヴィオこれ食べたい！」

と、ショートケーキを指差すヴィヴィオ

「仕方がない、買おう」

「わ〜い！」

「お父さん、僕もこれいいですか？」

「わ、私もこれが食べたいです」

「わかったわかった、順番にな」

こうしてお菓子を買って帰るスウェンとフェイト。帰りに遊び疲れた3人は眠ってしまった。

「ふふっ、寝ちゃったね」

「ああ、はしゃぎ回ったからだな・・・まあ、いいんじゃないか？」

「そうだね・・・」

いいながらフェイトは運転する。もうすぐ隊舎だ。

「二人とも随分甘えん坊になっちゃったみたい」

今までエリオとキャロはある程度フェイトを保護者と認識していても、敬語で名前を呼ぶ時もある。だがここ最近スウェンによく甘えるようになった。これがこの二人の本来あるべき自然体なのかもしれない。

「ねえスウェン？」

「なんだフェイト」

機動六課の隊舎につき、降りるフェイト。フェイトはスウェンに抱きつく。

「これからも、ずっとみんなでいられるかな？」

「・・・ああ、きっと一緒だ」

二人は唇を重ね合い、二人の愛を深めた。

余談だが、ヘトヘトのスターズとはやてたちはお土産のケーキを泣いて喜んだらしい。

Episode 11 「休日と外出と」(後書き)

秋風「今回はずいぶんラブラブモードにしてしまった」

スウエン「なんだが平和だな」

秋風「まあ、次回からシリアスに戻るよ？」

スウエン「そうか」

秋風「そういえばI・W・S・Pって人気なんだな」

スウエン「ああ、リクエストで出して欲しいときているな」

秋風「そのうち出すと思います」

スウエン「適当だな」

秋風「大丈夫、大丈夫、構想は練ってるから」

スウエン「次回、episode 12 『Xの決断』 静かなる反逆、
呼応しろ、ガンダム！」

Episode 12 「平和の中のX」(前書き)

三ヶ月ぶりの更新・・・まじで死ねるorz

書いてたらデータが吹っ飛ぶという悲しい事態が起きましてね、しばらく書くのをやめていたわけです

まあ、もともとこういう平和よりもギャグ的なのが好きなのですが、空気を読んで頑張りました。

では待っていた方々、どうぞ

Episode 12 「平和の中のX」

機動六課 女子寮 209号室

「……………」

そこは機動六課の一番奥にある女子寮の部屋。そこに先日保護されたナンバーズX「デイエチ」の姿があった。

「……………ここに来てもう3日」

ここに来てから、デイエチはここに閉じ込められていた。武装は没収されこそしたが、拘束もされないし、管理局本部に連れていかれることも、事情聴取さえない。脱出も考えたが、それに関してはしつかりと魔法などで抜け出せないようになっていて、脱出は不可能だ。

「……………私、見捨てられた、かな」

いつまでたつても、ここに救援が来ない。この敵陣のど真ん中に来るはずは確かにならないのだが、それがデイエチを不安にさせる。すると、ドアがノックされた。

「誰……………」

ドアが開かれる。そこにはデイエチを保護した男、スウエンがいた。

「気分はどうだ？」

「……………最悪」

「そうか」

そう言つてスウエンが食事を置く。

「どうして…………私を連れて来たの？」

本来ならば管理局へ護送し、尋問などをして色々吐かせるべきなのだが、スウエンはそれをしない。

「俺がしたくないだけだ」

「だって、尋問とかされないし…………それに、私は敵なんだよ？」

「敵だからと言つて、子供に尋問、拷問をする趣味はない」

と、スウエンはため息を着く。ため息をついて、スウエンは料理を置いた。

「飯だ」

「……………いらない」

ディエチは言つて顔をそむけた。しかし…………

ググウウ

「あ……………」

お腹が鳴り、顔を真っ赤にするデイエチ。

「我慢するな。別に自白剤なんか入ってない」

それを聞き、渋々とデイエチは料理を口にする。

「……！」

「どうだ？うまいか？」

「……舌を刺激する食べ物、今まで食べたことなかったから、分からない。でも、温かい」

「そうか、なら作った甲斐があったというものだ」

実を言えば、これを作ったのはスウェンである。アイナからデイエチが料理をまったく食べてくれないのでその相談を受け、スウェンが自ら料理を作ったのである。

「これ、貴方が作ったの？」

「ああ、まあな」

「……おいしいって、こついうことを言うんだ」

その後もデイエチは嬉しそうにその料理を食べていた。

食事を終えて、デイエチは紅茶を口にする。初めての食べ物、飲み物、スイーツ、それは彼女にとって初めての経験ばかりである。す

ると、スウエンもソファに座る。

「さて・・・少し、話をしよう」

「・・・何を？」

「お前を、いや・・・お前達を生み出した人間は誰だ？」

「・・・」

「・・・ジェイル・スカリエツィ」

「・・・」

スウエンが呟くが、デイエチは無言を貫く

「悪かった、こういう話はやめよう。お前の今後について話そう」

「今後・・・？」

「そうだ。お前がもし捜査に協力するなら刑も軽くなるし、社会復帰にも全面協力する。」

「それって、仲間を売ってこと？」

デイエチは静かに、怒りに満ちた声でそう言った。確かにその通りだ。

「言い方が悪かったな。個人的にお前達は仲間以上の絆がある、と思うのだが？」

「みんな仲間じゃない。姉妹だよ」

「その姉妹を、呪縛から解き放ちたいと思わないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

デイエチは驚きながらもスウエンを見る。彼はどうしてここまでしようとするのか、不思議で仕方がない。

「どうして？」

「？」

「どうして貴方は、そこまでしてくれるの？」

デイエチから見ればおかしな男だ。自分たちの仲間を殺そうとした人間を、そしてその姉妹を助きたいなど、誰が思うのだろうか？

「・・・・似ているんだ」

「え？」

「お前が、いや・・・お前達が、俺にな」

静かにスウエンはそう言った

「俺も同じだ。命令で今まで沢山の人間を手にかけてきた」

「!？」

「だから、もう俺と同じような人間を作りたくない・・・ただ、それだけだ」

スウェンの言葉に、デイエチは揺れた。優しく、心地よい言葉の響きだった。

「私は・・・」

シユン

突然ドアが開く。そこにいたのは金髪にオッドアイの少女、ヴィヴィオであった。

「パパ」

トテトテと眠そうに眼をこすりながら歩いてくる。

「ヴィヴィオ」

「パパ、おはよー」

「おはようヴィヴィオ。でも駄目だぞ？ここに入ってきたら」

静かにスウェンが言うと、ヴィヴィオがシユンとうなだれる。

「・・・」
「じめんなさい」

「よしよし・・・」

言いながらスウェンはヴィヴィオを抱き上げた。

「その子は？」

デイエチは思わず口を開く。

「ヴィヴィオだ。この前お前と一緒に保護した少女だ」

「ヴィヴィオです！」

と、丁寧にお辞儀する。

「私は・・・デイエチ」

と、思わず自己紹介をするデイエチだが、そこでハツとする。この子供こそ、ドクターが探していたマテリアルであると。しかもドアが開いている。ヴィヴィオを人質にとれば脱出など容易いだろう。すると、スウェンの膝を降りてヴィヴィオがデイエチに近づく。デイエチとしては絶好のチャンスである。だが、そこでスウェンの言葉が頭をよぎる

もう俺と同じような人間を作りたくない・・・

「お姉さん、どうしたの？」

「え？ううん・・・なんでも、ない」

「ヴィヴィオ、フェイトの所に行って着替えて来い。朝ごはんを食べに行くからな」

「は〜い！お姉さんまたね！」

こうしてまたトテトテとヴィヴィオは外へ出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ではな、何かあれば俺を呼ぶといい。あと、ヴィヴィオの遊び相手になってくれると助かる」

こうして、スウエンは部屋を後にするのだった。

部屋を出てから食堂に行くと、そこにはすでにフェイトとヴィヴィオがいた。

「スウエン、おはよう」

「ああ、フェイト」

言いながら食器を片づけ、自分の朝食を取って席に座る。

「あの子の様子を見に行ったの？」

「ああ」

「どう、だった？」

「首謀者は黙秘だ。まあ、気長にやるさ」

言いながら食事を食べるスウエンだが、フェイトは複雑な表情だっ

た。

「でも、はやくしないと・・・」

「ああ、わかってる」

そう、デイエチを保護していることは本局には書いていない。これははやてへスウエンが頼んだ我がままであった。だが、それもばれる可能性が低いわけではない。彼女から起こるであろう事件の協力をしてもらわないと彼女、デイエチの罪はずっと重いものとなる。

「それでも、あいつのことは俺に任せてくれ」

「スウエン・・・」

「すまない、フェイト」

「ううん、大丈夫」

そう言つてフェイトはスウエンの手を握る。

「私、スウエンを信じてるから」

「フェイト」

「でも・・・」

そこで、手を握る力が強くなった。

「浮気は、許さないからね？」

その笑みがスウェンには恐ろしく見えた。

一方その離れた席

「ねえ、なのはちゃん？」

「何？はやてちゃん」

「あのラブラブな空気の中にどうやって入ればええと思う？」

離れた席では、なのはとはやてが朝食を取っていた。

「うーん・・・それはフェイトちゃんとお話する他ないんじゃないかな？」

「せやねえ」

と、はやてがシュベルトククロイツを構え、同時になのはもレイジングハートを持っていた。

「後でじ〜つくり、『お話』せななあ」

「そうだね、はやてちゃん、ふふ、ふふふふ・・・」

食堂の中にはピンクと黒いオーラが充満していた。余談ではあるが、この日の医務室利用者は50人を超えたという

戻って209号室

「自分と同じ思いをさせたくない・・・か」

いつも姉であるチンクの優しさや、他の姉妹の優しさを感じていた
デイエチ。だがデイエチは男性から優しさを感じたことがないため、
耐性がなかった。

「私は、どうするべきなんだろう」

シユン

「こんにちは〜！」

「あ、ヴィヴィ、オ」

そこにはザフィーラに乗ったヴィヴィオの姿があった。ザフィーラ
はヴィヴィオの護衛で、ヴィヴィオはたんに暇なので遊びに来ただ
けである。最近のヴィヴィオの日課は機動六課の中を冒険すること
である。今日新しく開けた地へ来たくてしょうがないのだ。

「お姉ちゃん遊ぼう？」

「あそぶ？」

遊ぶと言えば、妹のウェンデイが良く訓練を遊びと言うが、こんな
幼い少女がそんなことを出来るはずがない。

「えっと、何をして遊ぶのかな・・・？」

「んとねえ・・・折り紙！」

「おり、がみ？」

聞き慣れない言葉である。ヴィヴィオがこうやってやるのと、折り紙を見せる。フェイトも日本で育っているため、そういった遊びをよく教えているのだ。そのあとヴィヴィオはデイエチと遊び続けた。

「すう、すう・・・」

「寝ちゃった・・・」

静かに、デイエチが呟いた。挙句の果てに護衛だったザフィーラも寝ている。

「・・・・・・・・・・私は」

「おねーちゃ・・・」

嬉しそうに寝言を言い、デイエチにすり寄るヴィヴィオ。デイエチはヴィヴィオを膝の上に乗せ、頭を撫でる。

「人になることって・・・こういうこと、なのかな？」

そんなことを考えていたデイエチだったが、デイエチも次第に睡魔に襲われ、静かに眠りについていくのだった。

しばらくして、スウエンとフェイトがヴィヴィオを迎えに来た。

「ヴィヴィオ〜」

「フエイト」

口に手を当て、スウエンは中の様子を見た。そこには仲良く、まるで姉妹の様に寝る二人の姿があった。

「もうちょっと、そっとしておこっか」

「そうだな」

こうして平和な日々はゆっくりと流れていくのだった。

ちなみにこの後なのはとはやてからフエイトへ『お話』が言ったのはまた別の話

Episode 12 「平和の中のX」（後書き）

秋風「ほんと、申し訳なかった。まさかパソコンのデータが吹っ飛ぶとは」

スウエン「バックアップが小説全てに及ばなかったからな」

秋風「まったくだ、学校のパソコンやだ」

スウエン「新しいバイト探して買え」

秋風「この不景気じゃ厳しいって」

スウエン「まったく、駄目人間だな」

秋風「うっさい！」

スウエン「次回、Episode 13 『機械仕掛けの少女とピンクちゃん』少女の悲しみ、断ちきれ！ガンダム！」

Episode 13 「機動六課の丸い悪魔」 (前書き)

超が付くほど久しぶり。なんと2か月ぶりです。最近はいろんなところを更新しては止まっています。申し訳ないです

とりあえず、頑張ります。今回は短いです。番外編みたいな感じなので

Episode 13 「機動六課の丸い悪魔」

デイエチが機動六課に少しづつなじみ始めてから数日。デイエチはスウエンに今回の事件の黒幕がジェル・スカリエツティだと語った。そして自分たちナンバーズは命令に従って動くだけなので詳しい作戦は分からないと。自分は10番目の姉妹であるので、詳しい作戦内容や計画を知らないとも答えた。スウエンは「よく勇気を出してくれた」と、嬉しそうにデイエチの頭を撫でた。これによりデイエチは管理局の罪を取り払われ、協力者として迎えられた。正確には機動六課の根回しが聖王教会に通用したというのが正しい。

「パパ」

「どうしたヴィヴィオ」

いつも通りに、機動六課は平和だ。デイエチは外へ出ることを許され、外で遊ぶ二人。すると、トテトテとヴィヴィオがスウエンに寄ってきたのだ。スウエンは何やら設計図を眺めている。

「パパも遊ぼうよ」

「すまないなヴィヴィオ、俺は今忙しい・・・後で遊ぼう」

「・・・はい」

ちよつとだけつまらなそうに返事をする、またトテトテとデイエチの所へと戻っていった。

『よろしいんですか?』

「・・・ああ、もう少しで完成だからな」

そう言うスウエンの映すものは丸くてピンク色の可愛いものであった。

数日後

いつもの日常を送る中での夕食の食堂。そこはフェイトとライトニングの二人、そしてスウエンとヴィヴィオの姿があった。ディエチは未だに部屋で食事を取っている。

「ヴィヴィオ、エリオ、キャラ・・・」

「う？パパ、なあに？」

ヴィヴィオが首を傾げる。すると、スウエンが箱を3つ取りだした。

「実はな、最近玩具を作ってみた。エリオとキャラのところにはおもちやがないし・・・少し子供らしさを持った方がいいと思ってな」

そう言っつて箱を渡して開けてみると促す。箱を開けて姿を現したのは、ピンク色のボールだった。ヴィヴィオの所は黄色。エリオのは赤、キャラのはピンクである。

「ボール？」

ヴィヴィオがそれを触ると、ボールが跳ね上がった。

「わっ!？」

「ヴィヴィオ！ヴィヴィオ！」

ボールは跳ねて、耳らしき部分をパタパタとする。それに応じてか、エリオとキャロの箱の中にあつたボールも動き出した。

「エリオ！エリオ！」

「キャロ！キャロ！」

「ふええ！？お父さん、これなんですか！？」

と、驚きながらそれを見るキャロ。食堂にいた他の局員たちも驚いている。エリオもびっくりしてそれを空中に放り投げてしまい、隣のテーブルにいたスバルの手に乗った。

「わー、可愛い」

「これはハロと呼ばれるロボットでな・・・俺の世界で歌姫が愛用するロボットだ」

ハロ。それはプラント最高評議会議長であるラクス・クラインが持つロボットだ。元々は、元婚約者にしてオーブにいる元ザフトのフェイス、アスラン・ザラの自作に開発されたロボットである。自立AIを持ち、言葉を入力すれば時と場合に応じて喋るというロボット。アスランの提供の元、量産されて市場に出回っているのだ。

「ヴィヴィオ！ゲンキ！ヴィヴィオ！ゲンキ！」

「あはははー！」

と、楽しそうにするヴィヴィオ。まあ、初めて父親がくれた玩具である。喜ぶのは当然だ。スウェンが偶然にもその設計データを持っていたのが始まりで。なぜかノワールの中にデータが残っていた。『彼女』の遊び心かもしれない。

「スウェン、あれって……」

「ああ、簡易ではあるが、AIはデバイスの物を使用している。インテリジェントデバイスと変わらん」

つまり、普通のハ口よりも高性能である。

「やろうと思えば仕事のサポートにもなる。そう言うものだ」

実を言えば、スウェンの世界でもあいつたロボットは貴重だ。MSをサポートする物は数少なく、OSが高性能でも、それを起動するまでのサポートがなければ難しい。なのであいつた半自立型で行動するロボットは貴重とされている。スウェンは知らないが、とあるジャンク屋とジャーナリストがそんなAIを使っていたりする。

「へええ〜……器用なもんやな、スウェンさん」

「まあな……シャーリーにも手伝ってもらったから簡単にできた。設計を見直したから時間がかかったが……やろうと思えば作ってやるぞ?」

と、スウェンが言うと、はやてがはははと乾いた笑いをする。

「あたしらは一応大人やで?」

「・・・話を聞いていたか？これはデスクワークでは大いに力を発揮する」

「え？」

仕事、という面では子育てによって自分たちの負担が減るという解釈をしていた大人チーム。だが実際は違う。この活用方法は・・・

「ヴィヴィオ、八口を貸してみる」

「え？うん」

と、ヴィヴィオがスウェンに八口を差し出す

「八口、コード解放『works』」

「了解！了解！」

すると八口の口から機会に接続する端子が出て来た。

「これを繋げば、デスクワークにおいてグラフ解析は5倍くらいには上がるし、報告書も恐らくどのような物が最適なのかさえも割り出すだろう。AIがインテリジェントな分、作るのは手間だが・・・この仕事病のお前達には十分だろう」

ワーカーホリックの機動六課にはかなりの助っ人だ。その瞬間、はやての目の色が変わった。

「是非っ！是非うちにも一台！」

「・・・わかった、わかったから離れる、顔が近い」

スウエンがため息をつく。まさかここまで喰いつくとは思っていなかったからだ。そしてはやては嬉しそうに食堂を後にしていった。

数日後

「・・・・・・疲れた」

「その、大丈夫？」

デバイスルームでぐったりするスウエンと、デイイチ。元々ナチュラルであるスウエンにはこの重労働は厳しい。宇宙ステーションで働いてからは戦うことよりも解析や研究に没頭した結果、ああ言った機械に強くなった部分はあるが、所詮はナチュラルである。理解や組み立てなどの頭を使うことにはやはり限界がある。デイイチも心配でそれを見に来ていた。デイイチはある程度なら外へ出ることを許され、こう言った重要個所であるならば最低限スウエンと行動を共にしているのなら問題はないとはやてが判断した。

「・・・あの、はい、お茶」

と、デイイチがお茶を渡す。デイイチがするのは主にこういったスウエンの助けや、情報についての考えを述べる補佐だ。デイイチ自身も、早期にここまで信頼されると機動六課がどれだけお人好しなのだろうかとも考えてしまうほどである。だが今更ながらここからスパイに成るつもりはない。スウエンがいる限りそれはないだろう。戦闘機人でも、人として生きていける。そう教えてくれたスウエン

がいるなら、他の姉妹にもそれを知ってもらいたい。それが今のデイエチだ。

「すまない」

そういつてお茶を飲むスウエンの回りには、大量のハ口がいた。様々なカラーバリエーションが存在し、赤、青、ピンク、紫、白に黒金や橙、水色などなどである。それぞれが所有するのであれば色分けしなればどれがどれだかわからない。まあ結局名前を呼べばその声帯に反応して持ち主のところへ来るように出来ているのだから驚きである。

「デイエチ」

「何？」

「“君の”ハ口だ」

そう言つて手渡したのは紺色のハ口。デイエチの手の上で耳をパタパタとさせている。

「ありがとう・・・」

「気にしなくていい・・・さて」

言いながら立ち上がるスウエン。そして大量のハ口を箱の中に入れ、そこを後にする。デイエチはそのスウエンにもらったハ口を嬉しそうに持ち、付いていくのだった。

後日、機動六課のデスクワークは数段的に上がったが、その分機動六課ではいたるところで丸い何かがつこめっていると時空管理局内で噂になるのはもう少し後の話

Episode 13 「機動六課の丸い悪魔」(後書き)

スウエン「まったく、2ヶ月放置とは」

秋風「返す言葉もございません」

スウエン「ちなみにあとどれくらいで終わらせるつもりだ」

秋風「どれくらいだろ、そう長くは掛らないと思うよ」

スウエン「読者を裏切らないように頑張れ」

秋風「さー！イエッサー！」

スウエン「次回、Episode 14 「姉妹の絆」己を縛る闇、
解き放てガンダム！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097k/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～星を見つめる者～

2011年3月20日06時31分発行